

# 都留文科大学報

Vol.139  
March, 2019

さよなら文大  
おくることば  
旅立つことば  
卒業論文題目  
文大だより  
ぶんだい堂





## 思いで深き文大

学校教育学科 添田 慶子

専任講師として1984年に本大学に赴任し、教員、職員、学生など多くの方々との時間の積み重ねを経て、35年間の勤務を終えることになりました。ハンガリーという国での留学生活も体験し、舞踊と音楽という新しい分野の研究者・教育者としてのスタートをしましたが、残念ながら数年後に大学の教員用のマイクロバスのよそ見運転事故に遭遇しその後10数年以上痛みや苦しみが続き、日常生活が普通に送れないため、まずは治療を優先し、授業をするのが精一杯でした。深い咳が何年も継続し通勤途中で病院に急行せざるを得なかったこともあり。集中して文字を読むことができず、新聞も本もしかりでした。もちろん研究活動も全く出来ませんし、日常生活もままならず仕事に力をつぎ込めない状態が長く続き苦しい期間がありました。病院にはあまり行かないでほしいと大学から言われ、一旦出た医師の診断による後遺障害の認定も、なぜか圧力がかかり後から医師がそれを撤回するというようなこともあり、また、年取ってきたら皆辛くなるのだから我慢せよ、被害者が外部の人だったらちゃんと補償はするけれど、との対応でかなり怪我以上に辛く悲しい思いをしました。とにかく体を健康にするために治療に通いながら、何とか授業をするのが精一杯でした。

その後少しずつ痛みは軽減していきましたが、自分の研究活動ももちろんのこと、授業以外の大学の仕事をする余裕はありませんでしたので、申

し訳なく心苦しく思っておりました。理解ある先生方には助けられ感謝しております。

海外での活動もできるような体調ではなかったので、男子学生から教えてほしいと要望のあった社交ダンスをリハビリも兼ねて始めることにしました。まさにダンス療法の実践でした。実は当時は社交ダンスがそれほど激しい運動量のものとは思っていませんでした。始めは少しずつ様子を見ながら慣らしていき、だんだんとレベルを上げていきました。怪我をしなかったら、学生に要望されなかったら、社交ダンスと出会うことはなかったかもしれません。身体運動、ダンスの奥深さや難しさ素晴らしさ、療法としての有益性など、多くのことを実体験として学ぶことができました。

「自然と生命」の健康に関する授業では、一人でも多くの学生たちに有益な大学生活を過ごしてもらえるようプログラムを考え、生活の改善化を図りました。実際かなり成果が上がり学生たちの笑顔で生き生きしている姿を見ることができ、前向きに目標をもって毎日を過ごすようになってくれて本当にうれしく思いました。

今後も、より素晴らしい大学になるよう、なお一層の発展を願っております。



ストリートダンス部パフォーマンス



ボールルームダンス



## 都留に「あるもの」

学校教育学科 教授 藤本 恵

着任したのは15年前、都留の第一印象は「何もないところだな」でした。そのころは、まだ都留文科大学前駅すらなかったのです。数年経って、ジェンダー研究プログラム運営委員会の仕事で、ある講演を聴きました。各地で町おこしの活動をされてきたという講演者は、地方で「ないもの」探しをするのはやめようとおっしゃいました。そうではなく、「あるもの」を数えていくのだと。

そのように視点を変えれば、すぐ、都留に「あるもの」を思いつきます。まずは、大学とそこにいる学生。初等教育学科で言語文化ゼミを担当していましたので、多くの学生と言葉を通して関わりました。とくにゼミ生は、卒業論文を書く過程で、自分に必要な語彙や文体を身につけたと信じています。その論文を書いた余力で、私宛てに寄せ書きや手紙、自作の絵本や小説まで贈ってくれる学生がいました。ゼミではやや複雑な議論もし、論理的な文章の書き方も学びあったはずですが、交わした無数の言葉を押しつけて浮かびあがってくるのは、「先生、大好き」という、単純な好意を表す一言です。初等教育学科の学生たちは、あるときは照れながら、あるときは堂々と、小学生のように「大好き」と意思表示し、「先生」と信頼関係をつくることができました。この言葉を受けとるたびに、私の心は、学生と大学と都留に結ばれていきました。世界中どこへ行っても、こんな大学生に会えるとは思えません。

もう一つ、都留に「あるもの」としてあげたいのは、市民のみなさんの暮らしです。大学職員の多くは都留市民だと思います。10年ほど前でしょうか、ある職員の方に誘われて、山に登りました。初心者私に、その方のお仲間といっしょに登らされ、下ろされ、温泉にも入って、山を満喫したのです。味をしめた私は、何度かいっしょに山に登り、食事をし、お酒を飲みました。それが、私の研究対象である金子みすゞの詩の勉強会につながり、成果をまとめた冊子『甲斐絹と文学散歩』を作りました。

この冊子とほとんど同時に生まれたのが、現在5歳になる娘の紫（ゆかり）です。また、それとほとんど同時に夫の単身赴任が決まり、私とゆか

りは都留で暮らすことにしました。勉強会のメンバーが、よそ者の私に代わって、アパートと保育園の手配してくれました。ゆかりが病気になると、病院まで送り迎えをし、背中におぶって私の帰宅を待ち、食事も届けてくれました。私の育児は過酷な「ワンオペ」に見えて、そうではなく、都留で子を生み育て、親を見送ってきた市民に支えられています。

山とみすゞとゆかりを介して見えた、都留のみなさんの堅実な暮らし、やさしい心根。世界中どこへ行っても、こんな市民に会えるとは思えません。

結局、都留に「ないもの」などありませんでした。世界にただ一つの場所、都留に「ある」大学生と市民に、大学教員としての私は生まれ、支えられました。教員養成大学の教員養成学科にしながら、教員を養成できたのかどうか、自信がありません。このあとも、養成できるのかどうか、自分の能力や適性に限界を感じて都留を去ります。何もお返しできないままではありますが、都留に「あるもの」は人を育み支える力だと、言いおいていきたいと思います。

時代や社会の要請で、大学が変わっていかねければならないことは承知しています。改革の只中だからこそ、都留の持つあたたかい輝きが失われないことを願ってやみません。



学生からの寄せ書き、手紙、絵本



## 退職のご挨拶

地域社会学科 教授 高田 研

2007年、今泉吉晴先生とのご縁で、環境・コミュニケーション創造専攻を開設するにあたり、本学に赴任いたしました。今泉先生からいただいた言葉が「外に出てください。都留には学ぶべきものがたくさんある。」でした。1年目には別宮有紀子先生等のご尽力で獲得した環境GPの資金をいただき、「フィールドミュージアムカフェ」を地域の人々と共に夕食を食べながら地域のことを語るイベントを市内各地で6回開催しました。市内にたくさんの人脈ができました。また2年目からは、大学内に通称「ソー小屋」を実習の授業で3年かけて建築、完成させました。学生達がノコギリの使い方もわからないことに驚きました。

フィールドワークの授業は岩手県葛巻町上外川地区の「森と風の学校」で実施して来ました。北上山系の最奥部で16戸の人々が力を合わせて命を繋いできたライフヒストリー。肉牛の子取り業。自力の民家や民具の報告書3冊を作りました。

フィールドミュージアムカフェを熱心に取り組んだ1期生の宮崎高虎は卒業後、熊本県にある自然学校に就職。廃校になった小学校で、地域資源を活用した自然教育に取り組んでいます。熊本地震のボランティア拠点としてもお世話になりました。

同1期生で小屋作りに3年間取り組んだ前原融は岐阜県神岡町の標高1000mにある山之村集落に移住して日本産のわらび粉復活の取り組みを始め、マスコミに取り上げられて今話題になって

います。

その後、東桂保育園や東桂小学校と連携して「鹿留子どもふれあいの森」の整備を進め、森林環境教育の空間として利用してきました。現在は市内3つの保育園・幼稚園と共に3回目の「幼児のための自然体験活動フォーラム」を開催し、県下の保育園・幼稚園に自然体験活動を普及することにあたっています。

2011年の東日本大震災では釜石を中心に田中夏子先生や何人もの先生方、そして学生たちと支援活動が続け、地元からの依頼によって5冊の報告書を出しました。その他、広島、熊本、岡山と学生や学科の先生と共に災害ボランティア活動を続けることができました。いつも大学や職員のみなさんに我々は支えられて来ました。

あっという間に学生たちと通り抜けた12年間で、私たちが創った「環コミ」はその経験を引き継ぎ、新生「地域社会学科」として既にスタートを切っております。

最後にご指導いただいた多くの先生、我儘を聞いて下さった職員の皆さん、都留市役所のみなさん、東桂保育園の先生。そして学外でいつも私と共に学生の教育に取り組んで下さった宝の山学芸員のバンチョー（佐藤 洋さん）、本学講師の加藤大吾先生、東桂小学校教頭の小口尚良先生にあらためてお礼申し上げます。





## 都留での得難い経験

社会学科教授 黒崎 剛

本年度限りで都留文科大学を去り、中央大学法学部へ移籍することになった。私は着任時50歳ということもあって、ここに骨をうずめようという覚悟を決め、最初の教授会の挨拶でもそう言った。だが大学側はそうは思わなかったらしく、お互いの幸せのため、移籍を選択することにした。たった8年間という短い時間だったか、経験したことは多い。

第一は、ゼミ（社会哲学）をもったことである。それまで大教室での授業ばかりだったので、12人ほどの学生と向き合って哲学することは、いままでにないことだった。私のゼミを選択するのはどこか悩める若者が多かったような気がするが、生きづらさを抱えている彼らに居場所を与えるという役割は果たすことができただろう。もっともそうは思わない人々もいて、来年度限りで社会哲学ゼミは廃止されてしまう。たしかに哲学をするような人間は従順じゃないから、彼らが求める学生像からすればはずれているのだろう。

第二は、組織の運営というものに関わったことである。私は非常勤時代が長かったので、組織に所属したことがほとんどない。一匹狼というほどかっこいいものではないが、「一人の、一人による、一人のための人生」を送ってきた人間が、組織に属し、作ることに関わるのは新鮮な経験だった。

社会学科のためになにがしかのことはできたと自己評価はしている。もっともまたそうは思わない人々もいて、私はいまどこの会議にも出席なくていいし、大学運営上の仕事もあまりしないでもいい身分になっていた。入試をはじめいろいろ忙しい他の教員の手前申し訳ない思いだが、それも大学側が決めたことであるからご勘弁願いたい。

第三としては、教職員組合のことが挙げられる。私はこの大学にくるまで組合に所属したことがなく、組合員になってからも学科の執行委員にさえならなかった。それが2015年に前任者から突然書記長になってくれと頼まれ、意図が分からず生返事をしている間にそうってしまった。生まれて初めて世のため人のため、他人様の生活のために走りまわった。これはほんとうに世の中の見方が変わるほど得難い経験だった。就任前から始まっていたいわゆる「退職金裁判」に原告教員の支援をして大学側の姿勢を正し、2度の勝訴で画期的な判例と言われるものをつくるのに協力できたことは忘れられないだろう。そのために払った代償も大きい。大げさに言えば、これからの人生、ほんとうに胸を張って生きていける体験をさせてもらったし、哲学者としての使命を果たすことができたから十分引き合う。自分の姿勢にそれなりに満足して消えることにする。ありがとう、私を支えてくれた教職員のみなさん。



研究室の窓から見た桜

# おくることば

## おくることば



学校教育学科教授  
西本勝美

卒業されるみなさん、まずは卒業おめでとう。ただし、大学の卒業は何かの「終わり」ではなく、みなさんの人生の本格的な「始まり」です。それぞれの人生への旅立ちを見送る大学教員の一人として、みなさんに伝えたいことがあります。それは、ネットなどでよく見られる無責任で根拠の怪しい主張や中傷に、簡単に乗せられないでほしいということです。そうした言論世界では、教科書などに記載されている常識をひっくり返すことが正義で、そこに真実があるかのようなメッセージで溢れていますが、それをもう

一度ひっくり返して、自分の頭で考えてみるという「知性」を、みなさんには発揮してほしいのです。

もちろん、教科書に載っていることがすべて真実だというわけではありません。問題の根元は、単純でわかりやすい二者択一で物事を判断し、それを他者に押し付けようとするところにあります。不透明で不確実な時代であるほど、人は単純でわかりやすい主張に流されがちですが、それは「考える」ということを放棄して、他者の思惑に身を委ねてしまうことです。社会に起こるあらゆる問題は、二者択一で捉えられるほど単純ではありません。わかりにくく、理解に意識的な努力を伴う、面倒なものです。しかし、その「面倒さ」に付き合い切る「ちから」こそが本当の「知性」であり、それをみなさんは大学の4年間で身に付けたはずで、今後の健闘と発展を祈ります。

## 富士山を心に幸あれ卒業生



国文学科教授  
鈴木武晴

大学からは富士山は見えないけれども、大学の授業や大学の外の生活の中で、富士山を意識しなかった人はいないであろう。

大学では、国文学科の教員がリレー方式で富士山を多面的に講ずる教養科目「歴史と文化Ⅸ」の授業を受講して、富士山についての知見を深めた人も多かろう。私が担当した「古典文学テーマ研究Ⅲ」の授業で暗誦した日本最初の富士山の歌である山部赤人の「富士の山を望（み）る歌」の美しく清く神聖な文学世界は、今後の歩

みの心の支えとなってくれるであろう。太宰治の「富嶽百景」を読んだ人の中には、天下茶屋からの富士山の眺めを追体験した人もいよう。

大学の外では、富士急の富士山駅や河口湖駅の周辺で、アルバイトをした人も多かろう。その行きと帰りの列車の窓から見た富士山に、心なぐさめられた人もいるであろう。

富士山が存在する生活は、人生の中でかけがえのないものであると言える。

昼間の光まばゆい雪の白富士。夕日に染まる紅富士。紅と白の富士山が皆さんの卒業を祝っている。

これからも、心の富士山は、やさしく語りかけてくれるであろう。励ましてくれるであろう。

世界文化遺産となり、外国の方も数多く訪れる富士山は、国際交流の象徴でもある。日本のみならず、世界でのご活躍を祈ります。

末尾に拙句を記して、贈る言葉といたします。

富士山を心に幸あれ卒業生

## It had to be Tsuru!



英文学科教授  
Hywel Evans

Well congratulations on finally making it all the way to your graduation. This was my first time to have a fourth year zemi class so it was an exciting ride for me too! Graduation means that you have reached the end of one journey and are about to start out on a new and even more exciting one. Strangely enough, that's how I feel as well! Of course, no one knows what the future may bring but I do feel that the efforts you have made at this university

have helped you to lay the foundations for a meaningful future experience. It is an amazing thing to have the luxurious opportunity to think about language, culture, and the way that our mind develops. For me, it was astonishing to witness my students becoming aware of the influences around them and reflect intelligently on what makes us human. To go beyond that and try to express those things so that others may understand and learn is an even more amazing opportunity. I feel honored to think that my students have had sufficient trust in me to feel comfortable doing that. It also shows that, while laying the foundations for the future, the students at Tsuru University also have the ability to concentrate their minds on the needs of the present. Congratulations again, everyone, and good luck with the future.

## 大学で学んできたこと



地域社会学科准教授  
両角 政彦

「大学で学んだことは社会で役に立ちますか?」と、ときどき聞かれることがあります。自身の経験からもなかなか返答に困る質問です。「いつか役に立つと思います」ともいえますし、「自分次第でしょうか」ということもできます。もちろん、教員がのちのち役に立つと考えられる授業をおこなうことが前提になるのですが。

かつて、小説家の吉川英治が「我以外皆我師」という言葉を残したとされています。自分以外はすべて先生であり、そこから学べることは自身の成長の糧になるということで、いろいろと示唆に富む名言です。いずれにしても、必要な

場に直面したときに、学んできたことを思い出したり、気づいたりすることができるかどうかにかかっており、そのトレーニングを積むことが求められるのでしょうか。

ところで、昨今話題のAI（人工知能）の定義として、ある研究者は「気づくことができる」コンピュータである点をあげています。もしこれが実現するならば、AIは気づいたり、思い出したりするだけではなく、うっかり忘れてしまったり、忘れそうになったりすることもできるようになるということでしょうか。それはもはや人そのもののように思われます。AIの行きつくところが、人のおこなう何気ない思考に通じているということであれば、人の思考過程の一つひとつが実はたいへんなことを意味しているのかもしれないと再認識させられます。

社会のさまざまな場面で、大学で学んできたことの重要性に気づき、思い出して、活かしていただければ幸いです。皆様のご活躍を心よりお祈りいたします。ご卒業おめでとうございました。

## 教養の〈眼〉



比較文化学科准教授  
志村三代子

ご卒業おめでとうございます。2015年に本学に着任した私にとって、同時期に入学された皆さんの旅立ちはひときわ感慨深いです。

ドイツ文学者の高橋義孝さんは自著『言いたいことばかり』のなかで「教養をつけるとは泣面をすることである。ぼろぼろとくやし涙を流すことである」と書きました。「なぜ事態はこうなのか、それを理解したいのに、読んででも意味が掴めず、「原著者を馬鹿野郎呼ばわりし、自分の頭を自分でなぐりつけ、くやし、残念で、ぼろぼろ涙をこぼす」。そういう切迫がな

いところに、教養の〈眼〉など備わりようがない」と哲学者の鷲田清一氏は解説しています。皆さんも4年間の授業のなかで、様々な人たちが書いた書籍や論文に出会ったことでしょう。難解な文章に頭を抱え、それがゼミで担当する論文だったらなおさらのこと、冷や汗をかきつつ「原著者を馬鹿野郎呼ばわり」した経験もあったかもしれません。しかし、その晦渋な著作に対して悪戦苦闘し、結果的にはその内容を100%理解できなかつたとしても、自分自身の考えで自らの言葉を紡ぎ出す行為を愚直なまでに積み重ねていくことこそ、大学での得難い経験なのです。情報が有り余る現代において、これから社会人となる皆さんは、情報の良し悪しを判断していく「教養」がより必須となっていくでしょう。とはいえ、大学4年間のうちに教養が身につかなかったと嘆く必要もありません。自学自習して身につく教養とは、社会になってからでも、自分が気づきさせずれば身につくものだからです。〈眼〉はいつでも開かれることを待っています。

## 大学院を修了するみなさんへ



大学院文学研究科  
社会学地域社会研究専攻  
田中里美

大学院文学研究科を旅立つみなさん、修了おめでとう。

それぞれが、大学院に進学する際、胸に抱いていた所期の目標を達成し、充実感をもってこの日を迎えておられることと思います。

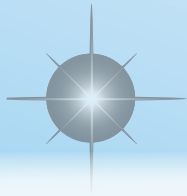
6年前、都留文科大学に赴任した私は今春、同じく6年の歳月を、本学社会学科、大学院で学んだ方々の旅立ちに立ち会うこととなりました。みなさんが研究活動を行い、修士論文に仕上げていく過程に並走出来たことは私にとっても大きな喜びでした。途中、思うように進捗せ

ず、はらはらさせられた時もありましたが、あとから振り返ってみれば、研究の過程で当然越えなければならぬ山や谷、大きな川の前的一端休止でしたね。本を読み、フィールドで人に出会い、学内外の諸先生方から支援を得つつ、最後まで粘り強く自分の頭で考え、さまざまなデータを一つの論文にまとめ上げるべく、それぞれが頑張りました。

みなさんは、これからの時代を生きていく何百万という日本の若い世代の中では、また、何億もの世界中の若い世代の中では、ごく小さな数の人びとにすぎないのかもしれませんが。しかし私は、これほど真摯な学究生活を送ったみなさんを社会に送り出せることを、とても誇らしく思っています。

どうか多くの人と交わり、皆さんの個性と力を多くの人に分け与えながら、充実した人生を送ってほしいと思います。そして、どうかこれまでに培った知性と教養を土台に、“善い社会”を創って行って下さい。





# 旅立つことば

## 旅立つことば



初等教育学科4年  
佐伯 峻希

入学してからの4年間はあっという間に過ぎ、卒業を迎える今となってもなかなか実感がわきません。例えば故郷を離れ、一人暮らしを始めた4年前の春。身の回りのことを全部自分でやるようになって、いかに実家暮らしが恵まれていたかを痛感しました。大学の授業では教師になるための専門的な知識を学び、それまで思い描いていた教師の姿は氷山の一角に過ぎなかったことがわかりました。そして学びを重ねる度に、一歩ずつ教師に近づいていく気がして嬉しかったのを覚えています。

大学生活では、いくつものかけがえのない思い出をつくることができました。なかでも大きな部分を占めるのがサッカー部で過ごした時間です。ほぼ毎日の



52代サッカー部引き継ぎ

ようにメンバーと顔を合わせ、主将を中心に練習メニューを考え、お互いを高めてきました。また、体育会ならではの飲み会で、「酒は飲んでも呑まれるな」という言葉の意味を思い知らされたこともありました。家族以上と言えるほどの絆で結ばれた仲間とともに、幼稚園から続けてきたサッカーをやりおこせたことは、私にとって何物にも代えがたい財産です。

これから故郷に帰り、私の夢であった教師としての道を歩んでいきます。時には壁にぶつかることもあると思いますが、都留文科大学で学んだことに誇りを持って、前向きに乗り越えていきたいと思っています。4年間支えてくださった先生方、友人、家族には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

## 学びと出会い



国文学科4年  
安藤 睦

書き出せばキリがないのだが、4年間の思い出で書きたいことは、大学で学べた多くのことについてだ。自分の学科の専門的なことはもちろんだが、他学科の講義を受けている時も私にとってはとても新鮮だった。自分の根底にある、知らないことを知る喜びに改めて気付かされたのである。特に、小林秀雄について触れた時は、これを学ぶために私は大学へ来たのだ、と思えたのだ。また、語学研修でカナダへ行ったことも私にとっては大きな経験だった。忘れられない思い出だ。ゼミでの学びもそうであった。教育という決して正解がない世界を、自分はどのように捉えて、どのように理解していくのか、ということを考えてきた気がする。そして、これからも正解のない問いについて考えていくのだろう。都留文科大学という場所に



国語教育学ゼミ 2018 夏合宿

来なければ学ぶことができなかった、その多くに出会えてよかったと思える。

そして、これらの学んだことについて外せないのが人との出会いである。普段の生活をしていればきっと交わることはなかったであろう人たちとの出会いだ。自分が変わらない出会いは出会いではないと、読書という授業で教わったが、それならば私は変わったと、多くの人と出会えたハッキリとすることができるだろう。

私と出会ってくれた家族、友人、先生方、全ての人に支えられて今の私が在る。どの出会いが欠けても足りないのだ。心から感謝しています。4年間ありがとうございました。

## 旅立ちの地



英文学科4年  
太田祐佳子

卒業を目前にし、都留という地に初めて足を踏み入れてからもう4年の歳月が経つのかという驚きとともに、寂しさに似た不思議な感覚を覚える。「第2の故郷」とはよく聞くフレーズであるが、都留は私にとって故郷ともまた少し異なった、深い思い入れのある地となっている。

都留という地は、今までにやったことがないこと、そして他ではできないことを経験するには絶好の環境が整っている。サークル活動にアルバイト、日常生活など、他大学の友人と話す度改めて都留の魅力を再認識する。そんな環境の中で私は4年間でそれまでの自分では考えられないほど多くのことに挑戦し、乗り越えてきた。それと同時に、今まで避けてきた「失敗」を人一倍重ねられた。その失敗の数こそが、私が



ゼミ仲間と

都留を第2の故郷と呼べない所以なのかもしれない。しかしそこには常に「人との出会い」があった。出会いとは、新たな自分の発見である。ともに時間を過ごし、時には叱責し、喜怒哀楽を共有してくれた仲間や先輩、都留市の方々の存在が、私に新しい可能性を見出してくれた。私をここまで成長させてくれた人々にしっかり感謝を伝えたい。

4月からは都内のIT企業に勤めることになる。大学では言語学を専攻していた私にとって、これもまた、全く経験のない新たな可能性への挑戦だ。不安もあるが、今の私には都留での学生生活で培った自分だけの強みがあると自負している。

胸を張って都留を旅立とう。

## 分岐点



社会学科  
現代社会専攻4年  
氣仙 遥

大学4年間は、あっという間のことでした。今まで育ってきた地元、親元から離れ、自分自身のことや、家族のこと、社会のことを、これまでとは違う視点で見つめなおすことができたと思います。

「勉強」というと非常に堅苦しく感じ、高校時代は熱心に取り組んだ記憶はありません。正直に言うと、大学進学は就職のための通過儀礼であり、「勉強」を楽しく感じることは一切ないと考えていました。

そんな不真面目な私ですが、2年次にとある先生の必修の授業を受講したことで、「学問」の楽しさに触れることができました。明確な答えがないからこそ、多角的な視点で事象を観察できることの楽しさを知り、自分の人生の視界が一気に広がるような感覚がし



謎の折りを捧げる私(楽しかった)

ました。その後、同じ先生のゼミに所属することになるのですが、非常に大変だった分、自らの将来を考える上で重要な学びを得ることができたと思います。4月からは、新しい環境での生活が始まります。大学での学びや問題意識を忘れることなく、常に学び続ける人間として、様々な人の人生を支えていきたいと思っています。

最後に、家族や恩師、就職活動でお世話になった職員の方々、個性豊かでたくさんの笑顔くれた友人たちには心から感謝しています。ありがとう。

## 成長



社会学科  
環境・コミュニティ  
創造専攻4年  
小川 壮一

卒業式を迎えるまで残りわずかとなった。入学からの4年間の大学生活を振り返ってみると、とても多くのことを学べたと感じる。

「文大の周りって何もないよね」との指摘を学内外の方からよく受ける。しかし、水と自然に恵まれ、多くの動植物に触れられる環境が都留にはある。そうした環境が好きで入学を決意したこともあり、都留の空気は心地よく感じた。かけがえのない体験ができたと思う。

人間との出会いも大きい。全国各地から集結した学生、厳しくも温かいご指導をして頂いた先生方、個性豊かな地域の方々など、その数は枚挙にいとまがない。こうした方々との交流は、私にとって毎日が新しい発



ゼミの授業風景にて

見の連続だった。私自身、大学生活の中で思い通りにいかないこと、不甲斐ないと感じることは何度もあった。その壁を乗り越え、成長できたのは他でもない、人間とのつながりであったと思う。心より感謝申し上げると同時に、これからもかけがえのない関係を築いていきたい。

来年度からは教員という職に就き、新たなステージへ足を踏み入れることになる。正直、期待と同じくらい不安な気持ちもある。しかし、幼い頃からの夢を叶えるための一歩を踏み出すことができたのは間違いなくこの4年間の経験があったからだ。これからもお世話になった方々への感謝を忘れず、日々研鑽を積んでいきたい。本当にありがとうございました。

## 汝を愛し、汝を憎む



比較文化学科4年  
高橋 明梨

4年次に1年間休学したため、同期たちから1年遅れでの卒業である。先に社会人となった彼らが都留を懐かしむのを目にする度に、理解出来ないと思っていた。私は都留が嫌いだった。

やりたい勉強が出来るなら、環境なんてどうだっていい。そんな思いで入学したものの、都会で華やかなキャンパスライフを謳歌する友人たちをSNSで見ると、嫉妬を覚え、惨めに感じた。こうなったら私にしか出来ないことを、今だからできることを、やりたい放題やってやろうと心に決めた。独学でロシアへ留学し、挑戦を恐れなくなった。テーマパークでアルバイトをし、人を笑顔にする幸福を覚えた。それらが重なって、2017年アスタナ国際博覧会日本館アテンダントとしてカザフスタンへ派遣された。何物にも代え難い、価値のある経験だった。異国の地で日本を見



ロシアで知り合った日本好きの少女と

直し、ずっと海外へ向いていた目が初めて国内へ向いた。帰国後は、民俗論などの講義で知ったものをこの目で見たいと思い立ち、青森を旅行した。津軽の文化に魅了され、私はあっさり移住を決意してしまった。春からは地域振興の職に就く。今こうして振り返ってみると、脈絡が無いようできて、全部しっかり繋がっている。

都留に来たから今があると思っている。正直、今も好きだとは言えない。けれど、文大を選んだことに後悔なんてひとつも無い。この4年間の経験は確実に私を構築しているし、きっと一生涯支えてくれると確信している。

## 都留文での5年間



文学専攻科  
教育学専攻  
吉度航太郎

都留文科大学に来るまで自分がここまで教育について学ぶとは夢にも思いませんでした。初等教育学科に入学し4年の月日が経ち、もっと教育学を学び自信をつけたいと思い入学した文学専攻科での1年もあつという間に過ぎた。

専攻科では、様々な先生方の実践を通して、子ども理解への考えを深めたり、教育学に関する論文を読み課題を抽出し、教師の在り方を学んだりしました。また、学部時代から教育現場を訪れ、子どもと触れ合うとともに生の実践を見ることで自分が理想とする教師像を考えることができました。



マレーシア旅行にて

最後に都留文科大学で専攻科を含め学んだこの5年間は、多くの仲間や先生方との出会い、多くのことを学ぶことができた充実したかけがえのない時間でした。ここで学んだことは、これからの私の人生にとって大きな財産となりました。ここでの学びを忘れず、子どもたちに寄り添い、子どもたちと共に成長することのできる教師を目指していきます。この5年間お世話になった多くの方々、特に共に学んだ仲間たちに心より感謝申し上げます。

## この春ぞ 心の色は ひらけぬる……



大学院  
国文学専攻  
長谷川豊輝

都留に来てから、はやくも6度目の春を迎えようとしています。

都留での学びを振り返ってみますと、地域に育てていただいたという想いが強くいたします。都留文科大学に入学した平成25年には富士山が世界遺産に登録され、海外から多くの方が都留を訪れるようになりました。文大もひろく外に拓かれた体制となり、多様なメンバーと学びを深めることができました。国文学科の「富士山学」の授業では毎週異なる方法での「読み」が提示され、とても刺激となりました。昨年は慶應義塾大学名誉教授の藤原茂樹先生をお招きし、郡内の地を巡り御講演をいただきました。私の主な興味は「伝承」にあります。これは文大での学びに触発され、十日市場の史跡を歩いてまわらる中で育まれたものです。

都留には大学の外にも学びのチャンスが広がっています。院生時には市内の中学校にて国語の授業をさせていただきました。特に、富士五湖のひとつである西湖が舞台の「幻の魚は生きていた(中一国語)」の授業では、生徒に教えらる

ことが多く興味深い展開となりました。先輩教諭の皆さまの御指導に加え、フリースクール・市内のボランティア活動・児童相談所などさまざまな場所で学ばせていただいた経験により、授業をつくることができました。御礼申し上げます。

大学院では恵まれた環境のもと、「伝承」がどのようにつくられていくのかについて考察を行い次の二編の論文と研究発表を成すことが出来ました。

- ・「風土記の浦島子伝の研究Ⅰ——冒頭の「相乗くことなし」を中心に——」『都留文科大学大学院紀要』第22集(2018・3)
- ・「風土記の浦島子伝の研究Ⅱ——冒頭部の「所由」考——」同第23集(2019・3)
- ・古代文学会六月例会研究発表「風土記の浦島子伝における記述——記事の問題として——」(古代文学会・2018・6)

これらは学内外の諸先生方に貴重な御助言をいただいたことに加え、同窓会に補助をいただき学会に参加させていただいたことにより成ったものであります。このテーマを展開させ新たな論と成すことができるよう、今後とも努力してまいります。

最後に学部・院と御指導いただきました鈴木武晴教授に御礼申し上げます。ありがとうございました。



双子の兄と共に



国語の授業にて

## 都留での6年間を振り返って



大学院  
社会学地域社会研究専攻  
**宇佐美真悟**

私が都留に来て6年が過ぎようとしています。長かったような短かったようなと、なんとも不思議な気分ではありますが、もう卒業してこの地から飛び立つのかと思うと、感慨深いものがあります。そこで、ここで私の6年間を振り返ってみたいと思います。

まずは学業面についてです。大学での勉強は、専門的な知識に触れる機会をくれたことはもちろんの事なのですが、それ以上に私の物事に対する考え方をレベルアップさせてくれるものだったと思います。未だに学ぶべきことは多いですが、物事を深く考える、背景を読み取るなどの、今後の人生でも活かせることを私に身につけさせてくれました。

次に部活動についてです。私は大学4年間、ソフトテニス部に所属しており、心身共に鍛えることが出来



大学院の学友

ました。先輩と後輩、同輩の関係を強く意識できる場であることから、社会に出ても生かせるような経験を積むことが出来ました。

最後に、人との出会いについてです。多種多様な人が集まる大学という場合は、様々な出会いを私にもたらしてくれました。それは先述した学業や部活動など、様々な場面で私を助けてくれるもので、同じ志を持った仲間たちや、熱心に指導してくださった先生方には感謝の念が堪えません。この場をお借りして感謝を申し上げます。

都留での経験は私にとってかけがえのないものとなりました。ここでの経験を大事にして、今後の人生を歩んでいきたいと思っています。

## 充実の2年間



大学院  
英語英米文学専攻  
**新部史歩**

私は英文学科4年生での教育実習で生徒を前に授業をする経験を経て教員になることを決意しました。そして大学で学んだ語用論をより深く学び専門性を高めたい、胸を張って将来教壇に立てるよう真摯に勉強に向き合いたいという思いがあり大学院への進学を決めました。

大学院では大変充実した日々を過ごすことができました。院生室では熱心に勉学に励む心温かい大学院生と共に時を過ごし私も勉学に励み自己研鑽することができました。様々な専門分野を持つ先生方からのご指導は見識を深め知見を広げるものでした。修士論文のテーマであるポライトネスについて学び研究をしていく過程で学ぶことの喜



共に学んできた大学院生

びを再認識しました。指導担当である福島先生から賜った丁寧なご指導やお言葉は今後も忘れることはありません。

最後にこのように充実した2年間を過ごすことができたのは、親切できめ細やかなご指導をくださった先生方と共に学び高め合ってきた大学院生の支えがあったためです。この場を借りて御礼申し上げます。また、私に大学院で学ぶ機会をくれた両親に感謝します。卒業後もより良い英語教師を目指し、日々精進したいと思います。

## 感謝を込めて



大学院  
臨床教育実践学専攻  
加藤 萌香



裏山のムササビ

私は都留文科大学に来て、よかったと思っています。都留では、ムササビはもちろん、多くの人と関わり、さまざまな思いを経験して自分を成長させることが出来ました。

大学では、教育に関わる先生から、知識や技術などをはじめ、考え方、生き方など多くのことを教わりました。また、地域の方と関わり、さまざまな立場の人が、それぞれ思いや信念を持って生きていることを知りました。さまざまな生き方をしている人と関わるうちに、「こうするべき」「これが正しい」と思っていたものは、実はそんなにこだわらなくてもいいことなのかもしれないと、捉え方が広がりました。

大学院では、より専門的に学ぶことの面白さを実感

しました。知りたいと思ったときに学ぶことができる環境というのは、とても素晴らしいです。新しく得る知識や経験は、より自分の考え方を多様にして、捉えられる景色は広がっていきました。学んで、分かることが増えていくことは、心の豊かさにつながります。

人と関わり合うことと信頼を得ることの大切さを学ぶことができたこの6年は私の人生にとって、とても重要な時間になったと思います。

特に、最後の一年は修士論文の執筆を通して、たくさんの人に気遣われ、励まされ、人のあたたかさに支えられました。都留で出逢ったすべての方に、心より感謝しています。



# 初等教育学科 平成30年度卒業論文題目

## 水口 潔ゼミ

- 石井 彩 女子800m走のレース分析  
—大学生女子選手 A.I の場合—
- 泉田 怜恵 女子400mハードル走の記録向上における一考察  
—都留文科大学陸上競技部 S.I の場合—
- 堅田 悠希 女子400mと女子4×400mRのレースパターンの違い  
—大学女子選手 Y.K の場合—
- 興石 果奈 運動経験年数におけるパーソナルティ特性について  
—都留文科大学の場合—
- 後藤 里乃 スポーツとライフスキルの関係  
—都留文科大の場合—
- 中川 真希 卓球のダブルス競技における戦型に関する考察
- 温水 優花 ソフトテニスの陣形に関する考察  
—攻撃型平行陣(ダブルフォワード)について—
- 野田 理都 短距離疾走能力と跳躍力との関係  
—都留文科大学陸上競技部の場合—
- 廣瀬 茉歩 都留文科大学女子バスケットボール部のゲーム分析  
—スリーポイントシュートに着目して—
- 舟久保沙耶 都留文科大学女子バスケットボール部のゲーム分析  
—ボールの獲得率が勝敗に及ぼす影響—
- 牧野 晃大 打者の一塁ベース到達までの走塁に関する考察

## 柳 宏ゼミ

- 浅野 里緒 スポーツ経験が社会的スキル形成に及ぼす影響の研究  
—都留文科大学学生の場合—
- 阿部 碧依 鉄棒運動における技術獲得の研究
- 安東 翼 本学サッカー未熟練者におけるインサイドキックの効果的な指導法について
- 石橋佳奈枝 サーブのルーティン効果に関する研究  
—バレーボール競技の場合—
- 井相田早紀 バレーボール競技活動の実態及び意識調査研究  
—都留文科大学体育会と同好会の場合—
- 河合 花奈 バレーボール競技におけるブロック効果率と勝敗との関係  
—関東大学女子バレーボール2部リーグの場合—
- 高根沢早紀 Gボールを用いたバウンド運動の技術習得に関する研究  
—即時的フィードバックと指導方法に着目して—
- 武内 梨紗 バレーボール競技活動の実態と意識調査  
—家庭婦人と大学生との比較—
- 刀川真由希 リベロプレーヤーのレシーブ効果率が勝敗に及ぼす影響に関する研究  
—関東大学女子バレーボール2部リーグの場合—
- 山口 雄城 スポーツチームリーダーの資質に関する研究

—本学学生と体育大学学生との比較—

## 添田 慶子ゼミ

- 高木 勇 ソフトテニスにおけるファーストサーブによるポイント取得率に関する研究
- 武智 気吹 関節の可動域と身体能力の関係性

## 上原 明子ゼミ

- 野口 慎史 小学校外国語教材『We Can!』と中学校外国語教科書の題材の比較  
—小学校から中学校への円滑な移行のために—
- 三砂 咲季 小学校英語教育におけるマザー・グースの活用
- 末次 春那 小学校英語教育における絵本の活用
- 丸岡優一朗 他教科と関連させた小学校英語指導
- 佐藤 栞 小学校英語教育における ICT 活用の意義と課題
- 今泉 優貴 小学校英語教育における文字指導の在り方
- 内田 宏樹 アメリカ合衆国における Language Arts の研究

## 筒井 潤子ゼミ

- 宇都宮桃佳 子どもたちが子どもたちらしく生きられるために私たちができることは何か  
—「いい子」とその危険性から考える—
- 河野さりな 愛着障害  
—正しい愛情とは、育てる人の目線から考えてみる—
- 川原 聖華 若者たちの「今」  
—若者の人間関係から生きづらさを考える—
- 北山 佳奈 子どもと自己肯定感  
—競争と付き合っていくために教師ができることとは—
- 黒岩 億人 子どもの貧困  
—教師としてのケアとその課題—
- 原 七海 虐待をとおして考える日本の子育ての在り方  
—世界の子育て制度と比較して—
- 宮城 実生 人が持つ攻撃性から考えるいじめ
- 山本 奈海 児童養護施設のイメージ  
—施設で暮らすということ—
- 渡辺 詩季 学校における教育と福祉の連携のあり方  
—ふくしまの学校を通して考える学校におけるソーシャルワーカー—

## 内山 美恵子ゼミ

- 下里 雅・高梨祥樹 山梨県東部地域に分布する新第三紀石灰岩中の化石について
- 高橋直樹・長岡直哉 都留市朝日川流域の水文地質と湧水の研究  
その1  
—九鬼山西麓エリア—
- 永嶺 仁志 山中湖湖底堆積物の有機化学分析
- 松本 賢弥 山梨県東部地震の震源域付近における小学生の地震に対する意識調査

## 西本 勝美ゼミ

- 渡辺 美侑 日本の英語教育を見直す  
—多文化共生のための英語教育へ—
- 大久保 咲 居場所とは何か  
—少年非行の事例から考える—
- 一瀬 桃花 高齢化社会の中で目指す地域活性化  
—若者と地域住民が関わり合う町づくり—
- 黒田 笑生 自分のあり方を自分で決めるために  
—子どもが丸ごと受けとめられるということ—
- 佐伯 峻希 多様な個性が輝く教室  
—子どもが自信をつける教育を考える—
- 坂口真之介 地域おこしへと向かう「協働」  
—静岡県川根本町の現状と課題—
- 中田 達弥 暗闇に光を見いだす  
—貧困家庭の子どもの「あたり前」を守る—
- 濱本 康聖 多様性の中で育つということ  
—子どもたちが本当に尊重し合える実践とは—
- 平野 里穂 多面化した震災の困難  
—学童保育の子どもから見えること—

## 寺川 宏之ゼミ

- 浅川 珠妃 醸造と算数
- 大矢 倫也 環論について
- 児嶋あゆみ アフィン曲線
- 田尻 幹人 ピタゴラスの三角形
- 松田 朋也 パスカルの三角形

## 中川 佳子ゼミ

- 岡崎優海・小笠原実央  
色彩から見る味覚イメージへの影響  
—お弁当の配色の観点から—
- 中島 海音 音楽が人の気分に与える影響について  
—音楽療法と共に考える—
- 中島 遥 LD生徒における自己評価と自尊感情の検討
- 開 しず香 親しい間柄における透明性錯覚の検討
- 稲葉 彩乃 悲しい気分と音楽聴取の心理学的検討  
—聴取音楽の感情価が与える影響について—
- 南 あずさ 女性の化粧行動と自尊感情
- 石井喜子・春日 亮  
味覚判断に及ぼす視覚・嗅覚の男女差  
—視覚と嗅覚とおいしさの関係性について—
- 大浜 幹也 注意に焦点をあてたサッカースキルの効果的学習  
—焦点と意識とスポーツスキル—
- 比嘉 美侑 大学生の地元志向の地域差の比較  
—パーソナリティ、友人関係、ポジティブな印象との関連—
- 平野 将吏 ジャンケンに必勝法はあるのか  
—勝ち組の人生を歩むために—
- 堀田 圭吾 大学生ソフトテニスプレイヤーに対するメンタルトレーニングの効用性について

## 藤本 恵ゼミ

- 笠原 昌江 戦争児童文学教材  
—子どもと読む戦争児童文学—
- 栗原 萌実 有川浩の戦略  
—『図書館戦争』シリーズと『ストーリー・

- セラ』を読む—
- 百田尚樹作品の特徴  
—〈罪悪感〉と〈愛〉から見る〈自己犠牲〉—
- 新美南吉『ごんぎつね』の授業  
—心のすれ違いを読む—
- 『注文の多い料理店』の授業実践  
—興味を引き出す読解のポイント—
- 遠藤周作『沈黙』論  
—手法と主題を中心に—
- 「盆土産」の授業提案  
—共感と関心を導く表現に注目して—
- 「大造じいさんとガン」の授業構想  
—豊かな読みのためのステップ—
- 今西祐行『一つの花』教材研究

## 春日 由香ゼミ

- 跡部 詩織 小学校国語科 読むことの授業における「書き換え」学習
- 鈴木 亜連 ユニバーサルデザインを使用した国語科授業
- 関 遥奈 クリティカル・リーディングと言語活動についての研究  
—高学年の説明的文章を中心に—
- 日記における題材指導の研究  
—題材設定で書く力は伸びるか—
- これからの時代の国語科教育とディベート
- 小学校国語科の授業における板書  
—「白いぼうし」、「ごんぎつね」を中心として—
- サブカル教材の可能性  
—マンガ教材を中心に—
- 第3期国定国語教科書の分析

## 鶴田 清司ゼミ

- 飯室 董 学びを深める授業づくり  
—教材研究の視点から—
- 片切 沙織 大村はまの作文指導について
- 北野 修斗 「習得」と「探究」が両立できる授業づくり  
—「教えて考えさせる授業」を手掛かりに—
- 学校が効果的に機能するために求められるスクールソーシャルワーク
- 互いを認め合える学級づくり
- 言語活動の充実とは  
—「単元を貫く言語活動」を手掛かりに—
- 「わかる」と感じる授業

## 十川 菜穂ゼミ

- 浅生 美晴 音楽教育と人間形成の関係  
—音楽の授業と部活動から考える—
- 柳生 梨乃 特別な支援を必要とする児童が楽しめる音楽実践について
- 横川 瑞希 ヨーロッパにおけるパトロンと芸術家の関係とその比較

## 清水 雅彦ゼミ

- 石川 希 英語教育における音楽の役割について
- 学校教育に求められる教師の工夫  
—音楽が子どもにもたらすもの—
- 子どもの表現力を伸ばす合唱指導
- 音と感情は連動するのかわかるのか
- 音声や音楽による心理的影響—



佐野 舞花 療法的音楽教育と子どもの心  
富田 淑恵 和楽器を活かす音楽教育  
林 優奈 ヘンデル音楽の探究  
—今に生きる魅力とは—  
渡邊 裕斗 学校における音楽教育の重要性

### 平野 耕一ゼミ

宮本有華・吉田沙姫・吉永菜由  
地震による液状化現象の仕組みと目で見て分かる教材についての研究  
野木沙羅・松坂彩加  
青空について小学生に分かりやすく説明する実験器具の研究  
加藤 映美 ペットボトルロケットの工学的研究  
—身近な材料を用いつつ、飛距離を伸ばすための工夫について—  
庭山 恵梨 学内にとどまらない学びの作り方  
—富士北陵高校での実践—

### 別宮 有紀子ゼミ

網干 基央 アブラムシは雑草の害虫なのか？  
—アブラムシの寄生が植物の種子生産に与える影響—  
大内奈々子・鈴木萌生・村松里紗  
大月市小金沢シオジの森におけるシオジの個体群構造  
—実生の分布からみえてくること—  
加藤 優奈 刺激によるキノコの成長促進  
—落下と音楽はシイタケの成長に影響を与えるのか—  
諏訪有香・湯澤美咲  
富士山麓野尻草原に生息する絶滅危惧植物の保全のための研究

### 岡野 恵司ゼミ

石井 祐太 アルキメデスによる求積法と方法の解説  
鈴木映里奈 ナポレオンの三角形と三角形の分割  
高森 爽楠 シュメール人の数学  
古戸 緑 有界図形内の格子点について

### 新井 仁ゼミ

阿久津 遥 統合的に見る力を育てる算数指導  
—面積の求積における指導について—  
石野 志織 小学校第6学年における比例の指導の在り方  
内田 悠香 分数の確かな理解を図る指導  
枝川 早希 空間概念を豊かにする算数指導  
櫻本 礼里 暗記する算数から考える算数のための指導法  
—図形の学習内容を通して—  
佐藤 圭祐 小学校におけるわり算の等分除と包含除の扱いについて  
中町 望美 小学校における割合の指導のあり方について

### 佐藤 隆ゼミ

赤石 美歩 不登校の本質から見直す不登校支援の現状  
赤尾 晴香 教師の仕事がブラックといわれる現状と課題  
池ヶ谷 結 学級づくりにつながる授業  
一瀬 紗希 部活動見直し論と部活動があるべき姿  
井上 貴瀬 就学前教育から小学校教育への転換  
黒田マリナ 個性尊重における教師の役割  
—一人ひとりが輝くために—

小林 晋士 なぜ学級崩壊するのか  
—子供と教師のつながりから見えるものとは—  
鈴木菜那子 特別支援教育 知的障がい児における生活単元学習の必要性  
定塚 彩加 「生きる力」をはぐくむ「家庭教育」支援についての検討

### 山崎 隆夫ゼミ

板山 幸歩 子どもの自己肯定感を育む学級づくり  
稲葉 実佳 子どもが共に学び合う教室  
逆瀬川澄子 読書と子どもたち  
—一本好きの子どもを育てるためには—  
佐々木貴大 子どもの「生きる力」を育む  
—ESDの実践から考える—  
早苗 李葉 子どもの「安全基地」としての教師と学級  
—アタッチメント理論から考える—  
中尾まどか 院内学級からみる生きることと学ぶこと  
廣瀬 桃花 学ぶ喜びを生み出す授業  
真柴 晶伍 子どもにとっての遊びの意義と実践  
勝山 穂香 子ども一人ひとりに居場所のある学級作り

### 市原 学ゼミ

井高 華琳 浅い関係で用いられるスキルに関する研究  
鈴木 美樹 浅い関係で用いられるスキルに関する研究  
三原 雄一 大学生における動機付け調整方略  
齋藤 航平 感謝された後に向社会的行動が起こるまでの心理過程  
弦間 友 男子学生の無気力の研究  
山本 俊輔 男性役割尺度の信頼性・妥当性の検討  
鈴木 聖也 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成  
藤本 拓海 SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用時の気分の違いによる関係  
中村 真緒 ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類  
—友人関係による居場所感の違い—  
五十嵐涼馬 学業場面における誘惑対処方略の有効性の検討  
佐藤 日向 学業場面における誘惑対処方略の有効性の検討

### 堤 英俊ゼミ

上田 万智 学校現場における無理のない「愛国心」の教育  
—地球市民として生きていくために—  
饗場 大介 心地よさを生む学級経営  
—給食指導に着目して—  
石田 有志 子ども集団の文化づくりにおける指導者のさじかげん  
—「いたばし青空学校」を事例として—  
越石 純可 「弱さ」を愛する学級づくり  
—授業における教師の働きかけに着目して—  
佐藤 夏海 人間らしく生きるための学び合いを生む学級づくり  
—帰りの会における教師のはたらきかけに着目して—  
中川 莉子 「やりがち症候群」と付き合いということ  
—依存する自己の生活世界に関する研究—

西 貴洋 障がい者スポーツの裾野を広げるということ  
—実践デザインに着目して—  
福島 元 学級で友だちができるということ  
—学級という「場」のつくり方に着目して—  
大谷悠樹 (前期卒業)  
ゆっくりの肯定と人間形成  
—辻信一のスローライフ論を手がかりに—

### 山森 美穂ゼミ

江口 直希 小学校高学年理科観察実験におけるスマートフォン顕微鏡活用の可能性  
大野恵利香 理科への接続を意識した生活科  
—植物染め活動を中心に—  
檜原 里奈 科学に関心を持ち続ける機会を提供する自然系博物館  
久保進太郎 小学校低学年児童の理科への興味を高めるおもちゃ遊び・おもちゃ作り  
林田 莞太 小学生を対象とした理科実験教室計画  
—「乾電池の不思議」編—  
峰松あかり 絵本を活用した小学校理科授業  
—単元接続を意識して—  
石毛 佑樹 溶液の均一性の理解を深める「もののとけ方」

### 平 和香子ゼミ

島谷 祐香 住まいと人生設計における研究  
橋本みなみ 小学校道徳教科書におけるジェンダー分析に関する研究  
齊藤 麦穂 絵本を用いた食教育の有効性  
石井 嘉明 家庭科における巧緻性の研究  
阿部 恵子 家具のリユースにおける空間デザイン  
長田 涼香 大学生の年金意識に関する研究  
中島知妃 教員養成系大学生における食物アレルギーの現状とエビデン使用に関する検討  
勝田日南野 教員養成系大学における食育プログラムの実践

### 竹下 勝雄ゼミ

稲垣裕一郎 グラフィティアートの変遷と教育的可能性に関する一考察  
安部友紀子 子どもがからだどころで感じる造形活動の可能性 一体験活動を手がかりに—  
田部井 瞳 表現方法の多様性と教育に関する一考察  
中野 駿次 遊びと学びについての一考察  
—信頼にあふれた教育活動—  
古屋 悠仁 造形遊びに関する一考察  
—材料や素材との関わりについて—  
山本 瑞希 図画工作で育む思考力・判断力・表現力に関する一考察

### 鳥原 正敏ゼミ

岡崎莉紗子 子どもの想像力を育むための活動に関する一考察 一苦手意識を持つ児童をみつめて—  
菊田 百花 学級を自治集団として育む図画工作科  
—共同制作の活動を通して—  
篠原 匠 小学校における漫画の活用についての一考察  
高群さくら 失敗と学びに関する一考察  
—図画工作の活動を通して—  
俵 美妃 絵本の可能性と課題に関する一考察  
—幼少期における読書へのいざない—  
八田 美咲 社会の変容を見据えて考える教育を主語とし

た ICT の活用について  
偶然と必然の共存  
—図画工作における ICT を活用した授業づくり—  
森山 麻由 まねからはじまる発想力と創造力

# 国文学科 平成30年度卒業論文題目

## 上代文学

鈴木 武晴ゼミ

- 岡野 希望 ヤマトノヲロチと酒  
 川原 岬 『古事記』序文対句考  
 匂坂 星美 万葉集七夕歌における「天の川」  
 佐藤 亮 上代文学の「火」  
 清藤 実希 「問ふ」の原義と用法  
 東出 桃子 古代人と月  
 一人々の生活との結びつき—  
 上代文学から見る刀剣  
 藤森 いずみ 神の性質考  
 星 麗奈 上代文学における「櫛」  
 山本 麻葉 記紀枯野伝承の比較と考察  
 高田 詩乃 黄泉比良坂考

## 中古文学

森田 直美・長瀬 由美ゼミ

- 青木 真奈 『枕草子』の「をかし」について  
 遠藤 実奈 勅撰三代集における夢表現の変遷  
 桂川 大輝 『源氏物語』における物の怪  
 一六条御息所を中心に—  
 胡桃 茉奈 『伊勢物語』二条后と『源氏物語』の女君  
 一藤壺女御・朧月夜を中心に—  
 後藤 一聖 『源氏物語』の乳母について  
 小松山 賢 『狭布物語』における『源氏物語』の影響  
 一飛鳥井女君を中心に—  
 佐藤 翔太 大島本『源氏物語』「花宴巻」における仮名  
 文字の使用規則について  
 鈴木葉穂子 『源氏物語』における本文研究  
 一国冬本鈴虫巻を中心に—  
 田浦 佳奈 『古今和歌集』内の貫之歌の修辞法  
 一見立てを中心に—  
 中屋 恵美 清少納言が男性に求めたもの  
 一藤原行成、藤原齊信との関わりから—  
 藤原 萌 『平中物語』の主人公  
 一主人公・平中像と作者の意図—  
 村田 隆輔 『竹取物語』の主題とその変容  
 一「かぐや姫の物語」と比較して—  
 八巻 美夏 『日本霊異記』中巻第三十三縁の生成論

## 中世文学

佐藤 明浩ゼミ

- 浅野 志帆 言葉からみる『閑吟集』の特性  
 川田 栞 葦を詠む和歌  
 虎溪 祐花 『とはずがたり』における物語撰取の考察  
 笹瀬美穂梨 平家物語における平家の芸能描写について  
 佐竹 祐香 平重盛と平宗盛  
 一覚一本と延慶本を通して—  
 佐藤 茉凜 『金槐和歌集』の動物が登場する和歌  
 佐村 京華 『新古今和歌集』恋歌中における景物の表現  
 富田 早織 藤原良経の和歌における「松」と「風」につ  
 いて  
 山川 京華 『平家物語』における平知盛像とその受容  
 山本 未希 初期の恋歌題詠について  
 吉田 茉美 「ありあけの月」考

## 近世文学

加藤 敦子ゼミ

- 阿部 剛 『北越雪譜』の執筆意図とその達成  
 石嶋あかね 『妹背山婦女庭訓』における公家悪、蘇我入  
 鹿成立考

- 鮫島 京香 『好色五人女』巻五「恋の山源五兵衛物語」  
 における男色  
 清水 苑佳 千崎弥五郎像の形成  
 杉山佳那子 山東京伝の仮名手本忠臣蔵もの黄表紙におけ  
 るキャラクター考  
 清家 万穂 『世間子息気質』における江島其磧の気質物  
 の手法  
 相馬圭太郎 「蛇性の姪」論  
 一富子の死が持つ意味—  
 辻本 聖 『傾城三度笠』の再評価  
 一『冥途の飛脚』と比較して—  
 沼 美乃理 『本朝二十不孝』女性不孝話から見る西鶴の  
 女性描写  
 藤森 渚沙 『新累解脱物語』における累の死  
 堀川 菜摘 『双生隅田川』論  
 一梅若と松若に着目して  
 前畑あすか 『先時怪談 花芳野犬斑』のおつまのモデル  
 について  
 三澤麻美子 『三人吉三廓初買』にみる八百屋お七の世界

## 近代文学

古川 裕佳ゼミ

- 阿部 祥子 村上春樹『かえるくん、東京を救う』論  
 井川裕美子 泉鏡花『眉かくしの霊』論  
 池川 貴基 太宰治「女生徒」論  
 大澤 花南 松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』論  
 上手有志果 筒井康隆『旅のラゴス』論  
 栗原 有加 萩原朔太郎『猫町』論  
 谷口日菜子 太宰治「皮膚と心」論  
 中島輝海椰 岩野泡鳴「毒薬を飲む女」論  
 森 真佑子 吉本ばなな『白河夜船』論  
 佐藤 史菜 室生犀星「蜜のあはれ」論

## 近代文学

野口 哲也ゼミ

- 松下健太郎 井伏鱒二「山椒魚」論  
 一川の中の囚人たち—  
 芦名 美彩 梶井基次郎「ある崖上の感情」論  
 一生と死の補完性—  
 黒田 愛実 谷崎潤一郎『春琴抄』論  
 一盲目から見える幸と不幸—  
 佐々木波香 太宰治「ヴィヨンの妻」論  
 一家族の形の変容—  
 佐藤 涼葉 海野十三「十八時の音楽浴」論  
 一ユートピアを求める人間の愚かさ—  
 篠田 将汰 内田百閒『冥途』論  
 一恐怖と異界の先にあるもの—  
 杉山香菜子 夢野久作『少女地獄』より「何んでも無い」論  
 一嘘の少女、少女の嘘—  
 鷹野沙亜耶 宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」論  
 一言葉を紡いで描いた「音楽」—  
 滝本 瀬織 江戸川乱歩「芋虫」論  
 一夫婦の生き様と行く末  
 田中 泰然 ラフカディオ・ハーンと＜宿命の女＞  
 一「雪女」「お貞の話」「和解」—  
 古堅 咲智 江戸川乱歩「人間椅子」論  
 一暗やみからの回帰—  
 法官 遥夏 太宰治「葉桜と魔笛」論  
 一青春への憧憬—

三浦彩奈瑛 萩原朔太郎「猫町」  
—詩人としての原点回帰の旅—  
吉田 貴音 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」論  
—少年の行く手を阻むもの—

**近代文学 田口 麻奈ゼミ**

張 賽 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論  
—現実との関連性—  
出浦 真緒 江戸川乱歩における幻想文学性  
—『パノラマ島奇談』を視座として—  
鈴木比奈子 田山花袋 作家像の形成  
—『少女病』を中心に—  
花岡 桃子 はやみねかおる作品に見られるメディア性  
—『ディレクション社』シリーズを中心に—  
早坂 梨菜 村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』論  
—母性とセクシュアリティの関係を巡って—  
東野美菜子 三浦哲郎と座敷わらし  
—『ユタとふしぎな仲間たち』を中心に—  
日野えりか 伊藤計劃『虐殺器官』考  
—自称無神論者が見る地獄—  
深沼 千尋 江戸川乱歩『陰獣』論  
—〈客観性無き探偵〉像—  
福田 萌栄 時代の中の「少女」  
—川端康成、吉屋信子を中心に—  
松木香奈美 麻耶雄嵩『さよなら神様』論  
—探偵の所在と「さよなら」の正体—  
松崎 篤嗣 米澤穂信『追想五断章』論  
—メディアを問う推理小説—  
三浦 静波 太宰治『お伽草紙』論  
—太宰が描く弱者たち—  
三浦 祐菜 伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』論  
—全体主義的テーマと読者のカタルシス—

**近代文学 有光 隆司ゼミ**

緑川 育玖 森博嗣『ヴォイド・シェイパ』と新渡戸稲造  
『武士道』  
内山 雄太 新選組の武士道  
—司馬遼太郎「燃えよ剣」論—  
大島 結希 国定読本のなかの偉人  
乗垣 彩美 梶井基次郎「冬の日」論  
小島ほのか 司馬遼太郎の乃木希典観  
—『坂の上の雲』・『殉死』を中心に—  
齋藤 直美 小説家「佐々木喜善」論  
坂本 陸哉 司馬遼太郎『坂の上の雲』における正岡子規  
鈴木 祥子 谷崎潤一郎「青塚氏の話」論  
—プラトンのアイデア論をめぐる—  
濱田 啓守 司馬遼太郎『坂の上の雲』と武士道精神  
溝口 周 森嶋外『高瀬舟』における視点の揺れと二面性について  
光宗 拓人 火野葦平「妻と兵隊」論  
椋木 優衣 司馬遼太郎『坂の上の雲』における広瀬武夫像  
山口 誠人 いわゆる司馬史観  
—『坂の上の雲』を視座として—

**国語学古代語 加藤 浩司ゼミ**

大嶋 庸晃 「いる」から「はいる」へ  
中内 幸恵 語頭母音イの脱落について  
羽生 明菜 中近世の狂言台本における「あて字」の使用

について  
森脇 遥菜 「雖」の訓法統合の時期と要因  
若林 祐希 神や人の通称にみられる形態素の時代的特徴

**国語学近代語 中川 秀太ゼミ**

石塚 円香 漫画における一人称代名詞  
—「俺」「僕」「私」「あたし」に注目して—  
上川 育恵 三重県方言の実態調査  
太田 桃佳 タレントのマツコ・デラックスにおける「—じゃない」の諸相  
小川なつみ 映画の邦題と原題における表現の違い  
黒尾 尚也 小学校一年生の教科書における振り仮名について  
—国語科教科書を中心に—  
白林 涼葉 書き言葉に入り込んだ話し言葉の要素  
—大学生のレポートを対象に—  
高橋 優花 SNSにおけるテキストコミュニケーションの特徴  
—「ありがとう」を例として—  
田中 彩 日本語教科書における複合動詞の扱い方  
田中 駿 大学生を中心とした重言の意識調査  
土屋 夏葉 『幼年雑誌』における外来語表記  
島山 絢帆 J-POPの歌詞から見る男女の性差  
増尾 春果 テレビドラマにおける「了解」の使われ方の調査

**漢文学 寺門 日出男ゼミ**

内藤 晴花 『論語徴』研究  
小山 華乃 李杜韓白の特徴について  
佐久間春香 『太平広記』における夢について  
櫻井緋那子 『説苑』における管仲像  
清水 瑠児 曹植の「風」と自然観  
知念 義久 白居易の性説  
戸圓 諄妃 美人描写からみる遊仙窟  
難波 杏奈 中井履軒の「孟子」解釈  
中島 晴恵 唐代の茶詩  
—白居易を中心に—

**国語教育学 野中 潤ゼミ**

川村 青葉 読み聞かせと子どもの育ち  
安藤 陸 小林秀雄「無常という事」論  
片倉みなみ アクティブラーニングと学校  
兼城 涼太 星野源の歌詞研究  
今野 翔太 ワークショップで開く国語教育  
昌 礼人 童話を授業に組み込むために  
—『赤頭巾』『灰かぶり』—  
須藤 真姿 国語教科書から見た敬語教育の問題点と改善に関する研究  
田澤 寛太 国語科教育におけるテクノロジーの活用  
—主体的な学びのために—  
近野 葉月 国語科教育におけるキャリア教育の実践について  
平野 大樹 Google for Education の利用で国語科教育はどう変わるか  
村吉 良太 食育はどうあるべきか  
—学校給食の観点から—  
山田 英莉 子どもの読書活動について  
吉田 蓮 古典教育を充実させる ICT 教育の在り方  
吉山 千尋 通常学級における特別支援教育の在り方

日本文化 菊池 有希ゼミ

- 岡崎ななみ 宮沢賢治作品におけるルイス・キャロル受容  
—「山男の四月」を中心に—
- 青木 祥恵 小川未明『赤い蠟燭と人魚』におけるアンデルセン『人魚姫』受容
- 石井萌々子 野田版歌舞伎における群衆表象  
—『野田版 研辰の討たれ』と『野田版 鼠小僧』  
を中心に—
- 石丸みず穂 『銀河鉄道の夜』における「ほんとうの幸」  
と自己犠牲  
—映画版との比較を通して—
- 香川 紡生 太宰治『人間失格』における「父」
- 近藤 千尋 岡本かの子作品における「エゲリア」  
—『渾沌未分』『鮎』『金魚撩乱』を中心に—
- 田畑 邑果 永井荷風における西洋
- 廣田 和也 芥川龍之介『藪の中』における夫婦関係  
—比較の視点から—
- 翠尾 季咲 日本近代文学におけるレモン表象  
—梶井、高村、川端作品を中心に—

# 英文学科 平成30年度卒業論文題目

## 大平 栄子ゼミ

- 伊藤 英理 多様化するディズニープリンセスと根強い古典的プリンセス像への憧憬
- 勝間田美里 タイ仏教のLGBTに対する寛容性
- 比嘉ちひろ Deepa Mehta の Water が過酷なインドの寡婦社会に与えた影響
- 廣瀬 優姫 9.11以降のイスラム差別への Counter-narrative としての My name is Khan
- 山本妃乃英 アメリカ合衆国におけるマイノリティとしての日系人の意識の変化
- 荒沢 夏穂 Tagore's Chitra に見るジェンダー問題
- 石田美都希 女性の生理現象についての Bodyform (英国) の CM にみる女性理解
- 小倉 有加 I Don't Know How She Does It にみるワークライフバランスの問題
- 菊原 咲希 Down Came the Rain から見る産後うつ
- 鈴木 絵理 パンク・ロックからみた女性の叫び—Riot Grrrl が求めた自由—
- 谷藤 優衣 I AM Malala からみる発展途上国の教育事情と教育の必要性
- 春名 千咲 I AM MALALA から考える子どもの貧困と教育
- 保木 陽菜 The Handmaid's Tale における生殖のジェンダー化
- 前田 優花 ディズニープリンセスから見る女性の変容
- 村瀬 仁美 『カードキャプターさくら』とジェンダーマイノリティの現状
- 李田 芽衣 子ども兵の諸問題に関する研究—シエラレオネ内戦に着目して—

## 加藤 めぐみゼミ

- 板垣 真子 オスカー・ワイルドの『まじめが肝心』における結婚観のルーツ
- 橋本 望 アイルランド文学から人工妊娠中絶問題を考える—時代に翻弄され、奪われる女性たち—
- 前倉ゆかり 女性が「働く」こととその将来—Made in DAGENHAM と The Intern を比較して—
- 渡辺 里菜 ディズニープリンセスの実写映画化によるジェンダー観の変遷
- 赤松 悠 『さらば青春の光』からみるモッズカルチャーとそのファッション
- 石川真衣子 The Handmaid's Tale における女性の生き方について
- 上山 陽加 ドラマ Downton Abbey の女性たちと結婚—女性の結婚と社会の変遷—
- 大澤 郁美 エマ・ワトソンから学ぶ現代のフェミニズム
- 大城 早紀 アイリーシュの逸脱性—Brooklyn に込められたトビーンの違い—
- 小佐野あき Mrs Dalloway からみる生きる苦悩—ミス・キルマンの苦しみ—
- 越智 直花 人はどのように自身と人生を振り返るか—『浮世の画家』小野益次から考える—
- 折居 花音 Harry Potter とケルトの復讐
- 加藤真貴穂 映像作品からみる Jane Austen の世界—Pride and Prejudice と変化する女性の生

き方一

- 坂本 賢 Nineteen Eighty-Four の現代的意義
- 古屋奈那子 『LALALAND』の結末から見る女性の人生の選択
- 渡邊美八子 Charlie and the Chocolate Factory でロアルド・ダールが伝えたかったこと

## 竹島 達也ゼミ

- 菊地 宏明 August Wilson の劇作品 “Ma Rainey’s Black Bottom” と “Seven Guitars” から考察する黒人性と白人社会へのプロテスト
- 内山 陽湖 現代アメリカ演劇におけるイスラム系アメリカ人の表象—“Disgraced” と “The Band’s Visit” からの考察—
- 長谷川千夏 酒場を舞台とした演劇の考察—“The Time of Your Life” と “Sweat” より—
- 村田 太一 「死」と「芸術」から見る Rent—HIV と 1980 年代アメリカ社会—
- 阿部 勝樹 “The Zoo Story” の孤独
- 生田 唯 アメリカのミュージカルから見る「問題劇」の系譜—ロックミュージカル『レント』の世界—
- 大橋 水紅 ミュージカル『Annie』から見るアメリカン・ドリーム
- 大村 悠綺 『Billy Elliot』に見るイギリス労働者階級の夢と現実
- 海沼 咲 DEAR EVAN HANSEN からみる現代を生きる若者の姿
- 小林 楓 “In the Heights” と “West Side Story” に描かれるヒスパニック
- 酒井まりあ アメリカ社会における女性の現実—“The Heidi Chronicles” と “Uncommon Women And Others” より—
- 深沢 雛子 Caryl Churchill 作 Cloud Nine におけるジェンダー・セクシュアリティ
- 星 祐希 The Adding Machine, Death of a Salesman, Sweat から見るアメリカ資本主義社会の影
- 山根 梓 アメリカ演劇における孤独と孤立の考察—“Six Degrees of Separation” と “The Zoo Story” より—
- 儀部 直樹ゼミ
- 小野寺美咲 多方面から考えるユダヤの知性
- 井口 雄介 ラルフ・エリスン『見えない人間』研究
- 植田 幹汰 アメリカ建国から今日までの黒人差別について—黒人差別が社会にどのような影響を与えてきたのかを探る—
- 鵜飼 萌 ジェンダー考察—洋画に描かれた出来事・人物から—
- 白井 仁大 ミッチ・アルボムの作品から見える人生観
- 竹松 将吾 モリーの教えと『天国の五人』についての死生観の考察
- 友井 祐貴 生きている間に何をするか何を遺すか ミッチ・アルボムのノンフィクション作品から読み取る死生観
- 前島 綾乃 小学校英語教育における絵本の活用

松本 万莉乃 アイルランド人から学ぶ移民としての生き方  
 三浦 有琳 映画に見る現代のアメリカ社会が抱える問題  
 三島 佳織 文化としての結婚  
 —『高慢と偏見』から見る結婚のあり方—  
 吉崎 元貴 『The Great Gatsby』論  
 若林 綺音 For One More Day から見る家族愛

## 鷺 直にゼミ

長坂 雅美 愛のかたちに隠された差別  
 —Gustave Caillebotte の歴史を通して—  
 飯村 菜由子 Candida における The Taming of the Shrew  
 の影響  
 井深 恵理奈 近年の社会における変化  
 岩元 みゆ 日英比較文化  
 大島 恭兵 フェルメールとオランダ美術  
 小野 瞳 ジャポニズム研究  
 —19 世紀フランスとイギリスの日本文化の  
 影響—  
 小林 晴菜 児童文学史の時代背景  
 —イギリス児童文学と日本児童文学—  
 佐々木 尚香 Dante Gabriel Rossetti と女性が与えた影響  
 について  
 谷端 真依 Cultural differences seen from art works,  
 between Japan and Europe  
 松本 泰輝 ウィリアム・ホガースの風刺画と 18 世紀イギ  
 リスの民の生活  
 間中 花厘 西洋絵画における女性美の獲得  
 —古代ギリシアからルネサンスの女性像の  
 変遷—  
 森田 有希 Orange Is the New Black が映しだすアメリ  
 カ  
 —根深く残存する人種問題—  
 山本 侑也 パーン＝ジョーンズの芸術観についての研究

## 中地 幸ゼミ

伊東 千夏 支持され続けるディズニープリンセス達の時  
 代による変容  
 内場 優斗 「ライラックス」  
 —19 世紀アメリカにおけるロマンティック  
 な友情—  
 小林 明日美 Julie Otsuka の When the Emperor was  
 Divine における日系アメリカ人の苦悩と葛  
 藤  
 菅原 千草 NO-NO BOY からみる日系人間の差別と愛  
 国心  
 山田 大介 幸せの哲学としてのパルクール  
 石井 夏帆 The Color Purple における黒人女性の自立  
 『ジョイ・ラック・クラブ』からみる母子関  
 係と二世世間の衝突  
 川端 麻夢 Possessing the Secret of Joy からみる女性  
 に対する暴力  
 小林 俊一郎 The Web of Ambiguity  
 — A Study of “Everybody’s Protest Novel”—  
 近藤 さくら The Color Purple 論  
 —小説と映画を比較して—  
 竹越 裕人 ルイ・アームストロングの人生と世界への影  
 響  
 中原 莉佳子 HIDDEN FIGURES における黒人女性差別  
 についての一考察  
 中村 紗和子 『ヘルプ 心がつなぐストーリー』からみる

アメリカ南部の人種差別と女性たちの関係  
 性

本間 耕生 The Handmaid's Tale におけるフェミニズム  
 について  
 増成 未紘 Shame における社会的居場所  
 増山 侑希 To Kill a Mocking bird からみるアメリカ社  
 会の人種差別・偏見

## Hywel Evans ゼミ

太田 祐佳子 A Minimalist Cognitive Account of "MERGE"  
 北川 恭平 Onomatopoeia and Culture  
 北澤 のぞみ Sports Theory: Learning and Acquisition  
 五味 尚也 Food and Communication: Food, culture and  
 language  
 宿野部 玲那 Cultural Appropriation as a Positive or  
 Negative Force  
 鈴木 直幸 Mountains in Language and Culture:  
 Attitudes to Nature and the Mountain  
 Experience  
 田中 玲帆 Freedom, Rights and Responsibilities:  
 Consequences for Culture and Artificial  
 Intelligence  
 寺内 陽菜 Animal Cognition  
 中居 愛莉 Discovery of Romantic Love in Japan  
 本間 さくら Mountain Worship and Japanese Race  
 Consciousness  
 メンドーザ カイレ マティオ カチャー  
 Cognition and The Animate Worlds

## 福島 佐江子ゼミ

神戸 一哲 異文化コミュニケーションに関する一考察  
 —語用論的観点から—  
 武中 遥菜 A Study on Politeness Theory and Apology  
 —From the Perspectives of Face—  
 安喜 桂志 中間言語語用論に関する一考察  
 —語用論的能力の観点から—  
 浅川 菜由 英語の依頼表現に関する一考察  
 —間接表現を中心に—  
 一ノ宮 舞香 英語における依頼に関する一考察  
 —日本人英語学習者の場合—  
 荻原 優実果 ポライトネスと断り表現  
 加納 みのり 語用論的能力に関する一考察  
 —please の使用を中心に—  
 鈴木 駿平 ポライトネス研究の再考察  
 —FTA の深刻度に関する三要素の分析—  
 中村 和貴 依頼表現におけるポライトネス  
 —語用論的観点から—  
 林 恵里 ネガティブポライトネスとポジティブポライ  
 トネスに関する一考察  
 —遠隔化表現と近接化表現—  
 光岡 歩里 ポライトネス理論と初対面会話

## 三浦 幸子ゼミ

青木 駿介 「美しい」に焦点を当てたコーパスに基づく  
 語彙研究  
 小笠原 翔悟 Importance of Nonverbal Communication in  
 Cross-Cultural Understanding  
 小俣 浩由 Exploring Effective Ways of Teaching  
 Grammar for Communicative Purposes

- 中村 優太 Revisiting Purposes of English Education in Japan: Focusing on the Reform of Entrance Examinations
- 中村 理枝 Analysis of Pausing Behavior in Speech about Gender Inequality by Emma Watson
- 岡地佑理絵 The Relation between Anxiety and Learner Characteristics  
—Focusing on Oral Performance—
- 川本 洋輔 Exploring Definitions and Purposes of Retelling in English Class
- 田中 吉雄 Exploring Problems of Language Environment for Foreign Visitors in Yamanashi
- 中谷 友香 Discourse Analysis of Darcy and Elizabeth in “Pride and Prejudice”  
— Based on Cooperative Principle—
- 長谷川莉子 Analyzing Changes in Gender Roles in “Beauty and the Beast”
- 福井紗也香 Roles of Interactional Modification in an Elementary School Teacher’s Teacher Talk in English
- 舩屋 奏美 Considering Effective Teaching of Grammar in English Classroom in Japan: Focusing on PPP and TBLT
- 倉澤 太郎 The Effects of Teachers’ Instruction on New Vocabulary in the Communicative Language Classroom: How Teachers Can Strengthen the Intensity of New Words

### 奥脇 奈津美ゼミ

- 浅野 杏奈 The Effective Method of Vocabulary Retention for L2 Learners
- 門 真理子 The Acquisition of Prepositions Based on CHILDES Database
- 佐藤 詩乃 A Study on the Will to Learn by Learners of Japanese
- 鈴木 開 The Effect of Age In Second Language Acquisition
- 高原 大地 The Benefits of Using Sitcoms for Second Language Teaching in Japan
- 古堅 優莉 The Acquisition of Phrasal Verbs by L2 learners
- 山本 ひろ The Acquisition of English Prepositions by Japanese L2 learners

### Hamish Gillies / Kolawole Olagboyega ゼミ

- 大縄 俊樹 Diachronic Studies of English Language from 1980 to 2018
- ガブリエル マコト  
Nikkei Brazilian Returnees  
— The Challenges, Adaptation to “Alien” Culture and Possible Solutions—
- 酒匂 美里  
“Lost in translation”  
—A Study Of Omissions In Japanese Literature Translated Into English Language—
- 佐野 遼平 The Factors Responsible for Native-like Proficiency in English for Japanese People
- 嶋田 唯 The Impact Of Vivienne Westwood On British Culture
- 富川あおい A Comparative Study Of British And

- Japanese Theatres
- 中村 優里 Effects of Omissions in Subtitles on the Comprehension of Movies
- 三沢佳菜子 Factors Responsible For Low English Proficiency In Japan
- 村田 友恵 Affective Factor Techniques for Enhancing WTC in English Classrooms in Japan
- 池 京香 How Extensive Reading Promotes Reading Motivation  
—A Case Study—
- 山田 倫子 Date Analysis of TED Talks based on Aristotle’s Three Rhetorical Appeals



# 社会学科 平成30年度卒業論文題目

## 現代社会専攻

### 現代史 菊池 信輝ゼミ

- 甘利 柁也 教科書にみる戦争被害者意識の醸成と今後の展望
- 石井 朔 福田赳夫元首相の東南アジア外交3原則の再検証  
—「第三項目」の挫折と現代における意義—
- 池田 悠人 日本における女性の洋服の浸透ともんぺの役割
- 久保田昌希 ヘイト・スピーチの変遷
- 佐藤 巧人 再生可能エネルギーから考える富士市創生
- 鈴木 聡太 日本軍「慰安婦」問題再考
- 砂川 英輝 「働き方改革」について考える
- 滝口 諒介 未完の戦後民主主義革命
- 原田 優花 明治天皇巡幸と木曾
- 樋口眞一朗 北一輝論
- 吉村 莞 日本における投票率の低下について

### 公共政策論 高橋 洋ゼミ

- 鮎合 真聖 コンパクトシティ政策の類型化  
—地域性に応じたコンパクトシティの在り方について—
- 青田 遼平 小規模学校におけるICTの活用について  
—デメリットの解消と課題の考察—
- 工藤日向子 基礎自治体におけるバイオマス事業の分類と手法  
—岡山県真庭市、北海道鹿追町、新潟県長岡市の事例を用いて—
- 氣仙 遥 情報公開法と情報公開条例との相互作用  
—神奈川県を事例に—
- 近藤 哲平 郵政民営化以降の郵便事業の現状と評価  
—「ネットワーク・サービスの維持と新規事業・収益の向上」両立の検証—
- 杉浦久留実 空家法制定前後にみる空家法と自治体条例の関係  
—地方分権化時代における国と自治体の相互作用—
- 瀧口笑実花 小学校・中学校教員の多忙の現状と対策  
—「教員勤務実態調査」の業務分類を参考に—
- 張 思倩 在留外国人の公的医療サービスの利用における課題と政策  
—外国人にとっての障壁と外国人による弊害を緩和するために—
- 松尾 海咲 シェンゲン協定とヨーロッパ諸国  
—人の自由移動をめぐる各国の対応と思惑—
- 山形 雄大 各自治体の公共施設再配置の取り組み  
—19団体の計画からの考察—
- 刘 如月 ニートに対する職業的自立支援策の現状と課題  
—地域若者サポートステーションを中心に—

### 現代政治論 進藤 兵ゼミ

- 朴 奎泰 韓国の大統領憲法改正案からみる政府形態  
—大統領四年一次連任制について—
- 石井 伊織 上野原市におけるコミュニティ・デザインの展望  
—“都会に近い田舎”の可能性

- 秋山 慎治 国民体育大会とスポーツ振興  
—今後の国民体育大会の在り方について—
- 岡田 大輝 市民の“健康づくり”意識の向上と市民マラソンの関係性
- 岡田 裕照 美作市の地域おこし協力隊を活かした持続的な地域活性化
- 荻野 美里 指定管理者制度から考える今後の公立図書館のあり方
- 小澤 拓弥 地域ブランドによるまちづくりの成功条件に関する考察  
—山梨県甲州市・笛吹市の事例を参考に—
- 岸川 千紘 VR・ARを用いた地域活性化
- 窪田 りさ 地域雑誌にはどのような影響があるか  
—地域雑誌『谷中根津千駄木』と岩手県盛岡市の『てくり』を例に、有料・紙媒体の意義を探る
- 小長谷一馬 静岡市の中心市街地活性化の課題と検討
- 小林 賢太 農業の六次産業化による山梨県への影響
- 斉藤 瑞希 アニメ聖地巡礼による新たなまちづくりのすがた
- 萩生有希乃 現代日本の若者とネット選挙  
—ソーシャルメディアの活用による若者の投票率向上の可能性
- 福田 涼太 ベッドタウンみよし市の今後  
—高齢化に関する視点から—
- 藤田 真伍 長野市公民館の変遷と未来  
—地域の社会教育施設に求められるもの
- 船木 勇助 山梨県における人口減少問題とそれに伴う地域消防への影響及び将来展望
- 山田 恭平 静岡市新サッカースタジアム建設の検討  
—立地適正の難しさと「稼げる」スタジアムへ—
- 渡部 沙奈 アンテナショップを拠点とした地域振興とその役割

### 社会哲学 高野 昌行・黒崎 剛ゼミ

- 大竹 爽太 現代社会にみられる承認欲求のかたち
- 澤田 雅斗 日本における女性の自己決定権の分析  
—人工妊娠中絶の持つ意味の歴史の変遷を中心に—
- 須惠 駿自 山村留学の変遷とこれから
- 瀬下 雄大 ベルクソン『笑い』における現象と構造、社会的意味の考察
- 時田 亮太 再生エネルギーの普及
- 油上 千紘 現代と各時代における正義について

### 企業経営・労働とジェンダー 野畑真理子ゼミ

- 稲笛 星空 日本における過労死の実態  
～日独比較～
- 大作 勇人 男性のワーク・ライフ・バランスについての研究
- 高 峰 現代中国における女性の地位向上とその変容
- 蔡 丹丹 中国における職場の男女差別問題
- 鈴木 夏海 日本企業におけるダイバーシティ・マネジメント  
—男女共同参画と女性活躍推進の視点から—
- 平 晃太郎 男性労働者の現状とワーク・ライフ・バランスについて

中村 優志 若年非正規雇用者の問題とこれからを考える  
梁 允瑞 韓国における女性の貧困問題  
余 曉清 中国における帰国留学生の就職問題について

### 環境法 小島 恵ゼミ

新井 花緒 地域に根ざした再生可能エネルギーで地域振興  
岩崎 真悟 不法投棄抑止に向けた課題  
—事件から学んだ教訓をもとに—  
大関 千佳 ソフトツーリズムを用いた地域活性化  
—栃木県益子町を例に—  
奥脇 恵 利益衡量において軽視されがちな利益の価値  
河野 大俊 持続可能な街づくりの形  
～財政規模による街づくりの最適解を探る～  
小暮 和真 世界遺産の光と闇  
—登録後にみえてきた地域の課題  
小松 正幸 日本の水資源を持続可能なものとするために  
—地下水資源との関わり方—  
佐藤 汐音 循環型社会の実現に向けて  
—海外輸出入問題とどう向き合うべきか—  
鈴木深友紀 鳥獣保護管理法への変遷から見る人間と鳥獣  
の共生  
手塚 誠也 地方都市の現状と地方創生

### 生涯学習論 富永 貴公ゼミ

板倉 有沙 子どもたちはICT教育で何を学ぶのか  
：タブレット端末の活用機能による段階的な  
学びに着目して  
小林 千華 キャリア教育の現状と課題  
小松 直人 民生委員活動における教育的価値  
小松 紘也 高等学校公民科現代社会の教科書における子  
育て記述分析  
志村 祐樹 日本で有給教育休暇制度が実現しないのはな  
ぜか  
神宮寺美緒 コミュニティ・スクール導入と地域活性化の  
関係  
中村 優成 学校外教育における学習支援の意義  
広瀬 和樹 郷土博物館論が戦後の博物館に与えた影響  
森脇 瑞貴 障害者の権利を基盤にしたインクルーシブ教  
育に基づく性教育  
：『季刊セクシュアリティ』の障害児・者の  
実践を分析する  
米澤 雄太 シニア学生の進学動機と学び  
：R大学に通うシニア学生のライフヒスト  
リーより  
菅谷 莉子 学校給食を通じた食育の現状と意義

### 日本経済論 林 公則ゼミ

伊藤 美羽 パラサイト・シングルの現代的意義  
片田くるみ ベネフィット・コーポレーション法の利点と  
課題  
川上えりか コンパクトシティにおける中心市街地活性化  
制度と立地適正化制度間の齟齬に関して  
坂口 実穂 音楽ビジネスにおけるソーシャルメディアの  
可能性  
瀬川 由佳 教育現場における叱る方法とその有効性の研究  
多田 萌乃 日本におけるキャッシュレス化の課題と展望  
西塚 沙稀 ファストファッションに代わるスローファッ  
ション  
野村 千紘 給食費無償化の意義  
松田 美咲 仮想通貨規制の方向性について

### 憲法 横田 力・浜田 豊ゼミ

井草 桂太 表現の自由の優越的地位について  
笠間 恵 表現の自由からみるマスメディア  
菅原 大 非正規雇用の現状と課題  
杉山季実子 緊急事態と基本的人権  
吉川 一敏 教育権の日本的展開

## 環境・コミュニティ創造専攻

### 環境教育 高田 研ゼミ

赤岡 真衣 公害教育の現状と課題  
—富山県イタイイタイ病を例として—  
大西 美奈 坂井市の観光の現状とこれから  
—丸岡城を事例として—  
落合 啓 学生アパートでの一人暮らしに潜む災害リス  
クについて  
—都留文科大学学生アパートA地区を例と  
して—  
角野茉莉奈 災害時における学生アパートの危険性について  
—都留文科大学A地区を事例として—  
川崎 杏樹 防災教育のこれからを考える  
—釜石市鶴住居地区における小・中学校の事  
例から—  
北岡 理央 テーマパークにおける大学生の楽しみ方の変化  
—東京ディズニーリゾートを事例にして—  
窪嶋 友紀 山梨県甲府市における「放課後子供教室」の  
現状とこれから  
酒井哉斐露 高等学校における制服自由化についての考察  
—長野県立高校を事例として—  
菅谷 梨花 山梨県における野良猫問題  
—芸術の森公園を事例として—  
鈴木 智貴 エコパルなごや改修への思い  
—被害者団体、行政からの聞き取りから—  
中沢 駿太 山間部の買い物事情  
—山梨県甲斐市亀沢地区を例に—  
林 駿汰 長野県中野市におけるし尿循環サイクルについて  
堀内 貫汰 富士山噴火に伴う防災の現状と課題  
—富士河口湖町勝山地区を事例に—  
牧瀬 達哉 ゼロ・ウェイスト運動はなぜ可能だったのか  
—上勝町における地域性と人間性の調査—  
矢野 由衣 学校教育における食農教育の推進  
—八王子市立中山小学校を事例に—  
矢部 智大 富士山の環境保全と観光開発に関する周辺地  
域の連携  
—入山規制の考察—  
島田 修造 東日本大震災避難者への支援の課題と改善点  
について  
—山梨県都留市・笛吹市における行政の支援  
と避難者が受けた支援から—

### 地域経済論 両角 政彦ゼミ

市川 遥 都留市にみる地方移住者の動向とそのあり方  
大橋 真紀 商店街組合の集客機能の強化と都市形成  
—神奈川県相模原市橋本地区を事例に—  
北原 拓真 農商工連携による農産物特産地化の考察  
—長野県駒ヶ根市「ごまプロジェクト」を事  
例に—

- 齋藤 梯綺 クーボン制度を利用した地域の活性化  
—山梨県のランチパスポートを例に—
- 坂神 綾那 企業の農業参入における地域的影響  
—静岡県浜松市を事例に—
- 佐藤 友梨 被災地における農業法人の社会経済的役割  
—宮城県山元町を事例に—
- 鈴木 祥平 山形県における酒造業者と酒米生産者の提携関係
- 鈴木 大貴 富士ブランド事業の展開過程とその実態
- 千野 美里 山梨県における原料調達の変化がワイン生産に与える影響
- 中尾菜奈子 高岡市における伝統産業による地域活性化  
—高岡銅器を事例に—
- 中村 美香 空き家活用から考える中山間地域の定住促進  
—山梨市の取り組みを事例に—
- 望月 幸季 ふるさと納税の返礼品提供事業者からみた地域的影響  
—山梨県富士川町を事例に—

### 農山村再生論 増田 直広・福島 万紀ゼミ

- 石山 航大 農山村におけるエコノミックガーデニングの有用性について
- 井田 優花 中山間地域における高齢者の生活状況と支援の現状
- 今泉 海 木質バイオマス発電が地域に与える影響について
- 沖 紘輔 観光産業のもつ農山漁村振興の可能性
- 加藤 詩乃 鳥獣害から見る人と動物のこれからのかわり方
- 倉澤 和嗣 中心市街地を軸として考えた場合の地域振興の在り方
- 関口 越祥 人と動物の関わり  
—シカの防除を通じて—
- 照井 朋幸 東北地方出身学生のUターン就職に対する意識の現状
- 丸山 日和 農山村再生における防災活動の役割

### 環境社会学 神長 唯ゼミ

- 米次真理乃 女性視点から避難所運営を考える
- 小川 壮一 山梨県内の耕作放棄地の発生要因とその対策
- 小野田和眞 原発避難者の子どもに対するいじめについて
- 季 文鈞 日本の食品ロスのメカニズム
- 佐藤 輝子 秋田県における再生可能エネルギーの現状とその可能性について
- 林 健太郎 東日本大震災の経験から災害時の避難者支援を考える  
—笛吹市と都留市の事例をもとに—

### 地域環境計画 渡辺 豊博ゼミ

- 芦川 菜摘 「子ども食堂が地域に根付く存在意義と今後の可能性・課題」  
—NPO 法人ゆめ・まち・ねっととNPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの子ども食堂を事例として—
- 遠藤 由唯 地域における公共図書館の役割とこれからのあり方  
—千代田図書館を事例に—
- 菊池 駿亮 「道の駅つる」による地域振興  
—山梨県中央市「道の駅とよとみ」と比較して—

- 高橋 玲佳 地方町村における高齢者の交通環境改善の今後のあり方  
—福井県若狭町を事例に—
- 滝 悠希 書店によるまちづくりの可能性
- 張 卿 中国天津市の大気汚染問題と市民運動について  
—日本四日市市の事例と比較—
- 秦 歌奈子 これからの日本の主権者教育について考える  
—ドイツと神奈川県立湘南台高校を事例にして—
- 宮本 豪 限界集落が立ち上がるために  
—埼玉県秩父市浦山の活性化案から考える小規模集落の明日—

### 都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

- 芦野 有梨 日本のナショナル・トラスト運動における課題と展望  
—国・行政による運動の推進に視点をあてて—
- 磯野 夏水 第一次世界大戦前後の大阪の住宅事情
- 岩内 玲央 足立区の先進的な空き家対策  
—北千住の事例を参考に—
- 上田 夏実 密集市街地における居住環境改善の現状について  
—東京都中央区月島地区のまちづくりを事例として—
- 梅津 美里 自治体等公的団体が企画するイルミネーションイベントの業務委託に関する研究
- 大金 喬 山梨県におけるSS（ガソリンスタンド等サービスステーション）過疎地について
- 萱場 若菜 学校建築におけるオープンスペースの利用実態に関する研究
- 佐々木里菜 シェア居住の視点からメタボリズムを再考する
- 田中 敦貴 空き家問題 都留市の事例
- 徳永ひなの 曾木発電所遺構の近代化産業遺産としての整備について
- 藤巻 裕紀 JR 中央線三鷹・立川間の高架下の多様な活用がもたらす地域への影響
- 松永 那月 日本の避難所における紙建築に関する研究  
—紙管とダンボールの優位性について—
- 山内 利奈 都留市における織物産業のまちづくりへの活用
- 山村 菜英 アメリカの公教育におけるICT教育技術導入をめぐる利益相反の問題
- 横森 知樹 バウハウスからみる造形教育と色彩理論の変遷

### 地域社会論 田中 里美ゼミ

- 下佐 颯斗 地域振興における道の駅の可能性  
—「富士川楽座」について—
- 新莊 直孝 職業としての地域教育コーディネーターの可能性
- 東 竜也 教員から見た部活動と生徒から見た部活動
- 植野 泰輔 世界遺産登録による観光地、観光客の変化について  
—三保松原を例に考える—
- 岡久 純怜 男性の育児参加について
- 菅野 快 ケニアにおけるHIV/AIDS対策  
—Vihiga 県の保健センターと母子手帳を事例に—
- 鈴木 優 上田市の地域資源の活用による地域活性化に関する一考察
- 森 美の里 障がい者と社会の繋がり  
—「みとおし」から考える—
- 五十嵐彩楓 高円寺と小杉湯

# 比較文化学科 平成30年度卒業論文題目

## 伊香 俊哉ゼミ

- 板橋 由佳 日本の台湾植民地支配からみる、植民地教育がもたらす影響
- 河津 萌香 戦争捕虜と虐待について
- 佐野 夏美 戦後日本教育史  
— 占領期から教科書裁判を中心に—
- 清水 夏希 ユダヤ人のホロコーストをめぐる賠償請求  
— ルクセンブルク協定締結における国家を超えたユダヤ人関係—
- 杉本 茉優 女性の戦争責任とはなんなのか  
— 日清戦争から第二次世界大戦の間で見る女性の戦争責任と彼女たちの戦後の生活について—
- 中村 美友 日本人兵士の反戦運動
- 村上 夏芽 戦時性暴力被害女性と日本軍兵士
- 森谷 秀香 戦争と精神障害  
— なぜ戦争神経症は日本で問題視されないのか—
- 山田 華奈 強制連行・強制労働の日独比較

## 岩崎 正吾ゼミ

- 西村 広野 デンマークの教育・文化と幸福度の関連  
— フォルケホイスコレとヒュッグを中心に—
- 岡部 玲奈 言語の消滅と保存における現状と課題  
— 日本の消滅言語を取り巻く状況から考える—
- 川原 萌 日本人と方言  
— 方言コンプレックスから方言コスプレへの変化から考える方言の役割—
- 高安 智仁 カタルーニャの独立宣言から見る一国多文化・多言語社会の振り方—
- 田中 瑞綺 日本映画の北米上映における言語文化の相違を埋める翻訳技術  
— ジブリ映画『千と千尋の神隠し』にみる日米台詞の比較から—
- 中塚 琴美 英語教育にみる多文化の視点— 読み書き重視からコミュニケーションへ—
- 中野 愛 訪日外国人の増加に伴う宿泊業界の動向と課題
- 湯川 遙希 日本のセクシュアルマイノリティの認識に關する現状と課題— 2000年以降の連続ドラマを対象として— 13:37 2019/01/31

## 内山 史子ゼミ

- 石田 千明 一人っ子政策が中国の人口高齢化に及ぼした影響と現在の人口政策
- 清原 康代 『ファッション化』するヴェールと日本企業の取り組み
- 国吉 理子 インドネシアにおける華人のアイデンティティの変容  
— 華人抑圧の歴史を経て—
- 小西谷海花 日本の外国人労働者の受け入れ政策とその問題点  
— 在留資格と現実のズレ—
- 篠原 佑佳 広がる日本の貧困と生活保護制度
- 住吉 将和 タイ経済の発展と米作農業の変化

- 中島 稔久 マレーシアの教授言語政策  
— 理数科目の英語化に関する議論を中心に—
- 箕川明日香 東南アジアの影絵芝居  
— 現代における実践と今後の課題—
- 宮島 花奈 シンガポールにおける都市再開発と歴史建造物の保存  
— 歴史街区保全事業を中心に—
- 森山 翔 民主カンブチア思想  
— クメール・ルージュはなぜ虐殺を行うに至ったか—
- 永森 翔大 ベトナムの世界遺産・ハロン湾  
— 持続的な観光のための取り組みと課題—

## 大辻 千恵子ゼミ

- 岡村 李子 子どもの成長と絵本  
— ジェンダーフリーの絵本を求めて—
- 加藤 遼 ジェンダー教育はどうあるべきか  
— 国際比較の一例から考える—
- 小島 大和 21世紀におけるイギリスの移民政策  
— 寛容と規制に揺れる「国民」統合のかたち—
- 佐々木麻衣 職場のセクシュアル・ハラスメント  
— 防止法の制定を目指して—
- 佐藤奈々花 アメリカの中絶問題を考える— プロ・ライフの主張から—
- 砂崎 優果 インターセックスを生きる  
— 多様な性のありようを認める—
- 高橋ひかり 女性と労働  
— 日本はなぜ女性管理職が少ないのか—
- 河 英珍 移住するコリアン  
— アメリカとカナダに移住するコリアンのコミュニティとアイデンティティ—
- 長谷部雄大 スポーツと人種  
— アメリカを事例にして考える—
- 原田 将司 これからの日本の少子化対策  
— フランスの成功事例から考える—
- 山田 倫也 男らしさという鎧  
— 男らしいではなく自分らしいを考える—

## 岸 清香ゼミ

- 井上あかり 国家権力をどう扱うか  
— 市民団体「明るい警察を実現する全国ネットワーク」から始まる意識改革—
- 岡村 奏愛 スタイルとしてのストリートダンス  
— 作品創作コンテスト「Legend Tokyo」にせめぎあう自己表現と社会的存在—
- 黒坂日菜子 セクシュアリティから「家族」を問う  
— LGBT団体「にじいろかぞく」による子育て実践の発信—
- 小森 優生 広告が社会を語るとき  
— 疎外された者たちに向けられた柔らかな反骨精神—
- 犀川 真衣 麻雀というコミュニケーション  
— ノーレットネットワーク「ニューロン」で磨かれる生き方の戦略—
- 佐川 晴香 文化財の観光資源化と寺社による教化活動の変容  
— 春日大社の展示活動における信仰の再構築—

渡邊 文人 日本語ラップの新展開  
—「フリースタイルラップ」の存在と意義—

## 齊藤 みどりゼミ

阿部 駿介 日本の移民政策と今後の展望  
—フランスの移民政策と比較して—  
小浦ひかり 日本人の働き方を考える  
—労働における「日本式」の限界—  
友永晋太郎 進化論裁判  
—アメリカにおける宗教の意味—  
橋本 奏絵 リピーターを作り出すディズニーの魅力—  
東京ディズニーリゾートを中心に—  
萩原 唯人 太平洋戦争期から戦後における日米戦争観の違い  
—日本人とアメリカ人それぞれの原爆観、  
パールハーバー観—  
福満 香咲 ミュージカルにおける舞台芸術  
—劇団四季の作品を中心に—  
翠田 真一 “共生”を問い直す  
—日本の国際化と移民問題解決に向けて—  
長沼 磨輝 役割語から見る日本人の人種観  
—ハリウッド映画の翻訳から—

## 佐藤 裕ゼミ

工藤 太地 貸借関係における搾取と相互扶助  
—南インドにおけるインフォーマル・セク  
ター労働者を事例に—  
石岡 良平 インドにおける社会運動とガンディー主義  
の再解釈  
—脱開発から反汚職運動まで—  
岡田 篤志 ミャンマーへの開発援助  
—民主化過程における貧困削減の再検討—  
佐々木風帆 フェアトレードは何を達成するか  
—市場の変革と生産者自立の可能性—  
佐藤 恵美 農村の紐帯からみる女性の主体形成  
—長野県阿智村における地域活動の記録—  
半田龍之介 中国における若者たちの疎外と精神生活  
—階層化・学歴社会化の再検討—  
牧 直樹 ドヤ街から「福祉のまち」へ  
—大阪・西成特区構想にみる包摂と排除—  
横田柚香子 途上国におけるメガ・スポーツイベントと開  
発  
—〈経済成長と排除〉をめぐる諸議論をてが  
かりに—  
吉原 歩 途上国都市のグローバル化と貧困の郊外化  
—インド・グルガオンの事例を中心に—  
割田 真帆 観光開発と創られた伝統文化  
—インドネシア、バリ島の芸能・日常に着目  
して—

## 志村 三代子ゼミ

秋山 莉菜 『バック・トゥ・ザ・フューチャー』から見  
るタイムトラベル  
穴田 凌也 サイバー・パンクアニメの考察  
—『AKIRA』と『GHOST IN THE SHELL  
攻殻機動隊』から—  
岩上 琴音 アイドル・スターとしての高峰秀子  
風立ちぬ研究  
大河原寿々 風立ちぬ研究  
—宮崎駿の夢と創造—  
小澤 麻衣 「日本の父親」笠智衆から考察する父親像の

変化

木谷弥太郎 映画のための音楽と音楽のための音楽  
—『ウエスト・サイド物語』と『逢引き』か  
ら探る映画音楽—  
高橋 明梨 時代劇における偉人たちの描かれ方とキャ  
ラクターの変化  
—新選組を例にして—  
高橋 慧太 オリンピックにおけるドキュメンタリー映  
画の演出と編集に関する考察  
—レニ・リーフェンシュタール監督作品『オ  
リンピア』—  
高橋 梢 ディズニー映画『ムーラン』の分析  
—イメージの搾取と求められる東アジア像—  
高橋 由美 映画女優・オードリー・ヘップバーンがファッ  
ションリーダーとして愛され続ける理由  
武内麻希子 宮崎駿が描いた理想と現実の世界  
—『魔女の宅急便』『ハウルの動く城』から  
見る人間の葛藤と成長—  
田中 里実 映画女優 吉永小百合の女優像  
—サユリストとファン文化—  
土屋美実奈 『羅生門』『MISTY』にみる男女像  
春田 峻佑 西部劇的「男らしさ」と擬制的父子関係  
—クリント・イーストウッド監督作品を参考  
に—

福田 理沙 『麗しのサブリナ』オードリー・ヘップバー  
ンと日本の関係

福原 佳奈 『家族ゲーム』から見る食卓風景と対人距離

## 邊 英浩ゼミ

天野 羽衣 家族・宗族の変容と再構築  
—現代韓国に生きる人々の選択肢の拡大と  
それに伴う諸問題—  
藤田 星南 生命論の中のベトナム  
城田 波輝 AI進化の進展と生きがい  
—歴史と現在から分析する未来の社会と私  
たち—  
池谷はる香 日本の外国人受け入れ政策  
—入国管理局の現状と改善案—  
池 方円 中国の民主化の展望  
宮入 千尋 韓国語母語話者向け日本語教材研究  
「国技」としての相撲  
高原 美咲 —祝祭とスポーツのはざまで—  
大島 有紗 純白論  
大坂 奏子 多民族・言語国家における平和構築  
—タンザニアの統治から—  
崔 喜承 韓国のフェミニズム運動  
—韓国のフェミニズムと性少数者—  
羅 茗卿 幼児教育の比較研究  
山本 和広 「在日特権」言説論  
福田 真也 体育会組織と規約  
堀内 亮汰 世界文化遺産としての富士山

## 分田 順子ゼミ

境野 隼太 イギリス独立党 (UKIP) の台頭をめぐる一  
考察  
—UKIP 支持者とその EU 観に焦点を当てて—  
本多由樹子 外国人介護士に求められる日本語能力とは  
—介護現場と制度の狭間の日本語—  
中村 裕子 外国人の子どもが育つ場としての学校と地域

- コミュニティ  
—神奈川県大和市と横浜市を中心に—  
佐々木雪乃 暮らしの中の多文化共生  
—芝園団地における情報伝達のあり方を事例として—  
三浦 奈央 家事労働の再分担を通して築く新たな夫婦像  
—テレビドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」のジェンダー表象考—  
水谷英里名 外国にルーツを持つ中学生の進路選択  
—浜松市の公立高校への進学を中心に—  
最上 彩 日本における子育て支援の現状と課題  
田中隆之助 マスメディアによる少年犯罪の印象形成について  
—神戸連続児童殺人事件を例として—

### 水野 光朗ゼミ

- 高野 僚 エルサレムについて  
高久 翔太 捕鯨について  
徐 裕奈 韓国在住朝鮮系中国人コミュニティ研究  
岡本裕紀子 Multiculturalism in Japan

### 山本 芳美ゼミ

- 三塚安久里 心霊写真の語られ方の変遷  
荒井 千秋 人工装具の進歩からみる「見た目ケア」  
—QOL 向上へのアプローチ—  
荒木香那子 戦後洋裁ブームの変遷  
—お手製から既製服へ—  
内田 美優 白粉とファンデーション  
—女性の肌意識を支えるタイプ別特徴と製法—  
小熊 歩未 ポップカルチャーにおけるアイヌの表象  
—『ゴールデンカムイ』の分析—  
佐々木美咲 1945年から2017年における日本女性の名づけの変遷  
—明治安田生命の「名前ランキング」からの分析—  
笹本 茉那 高度経済成長期を支えた女性のライフヒストリー分析  
—両祖母の人生史を素材に—  
清水 毬圭 コミュニケーションロボットのデザイン  
—不気味の谷との関係性—  
志村 知里 20～30代前半の日本女性における理想の肌観念の変遷  
—1980年代から現在まで—  
鈴木 美穂 狐の博物誌  
—何故狐が信仰されるのか—  
妻木 愛佳 ナチュラルメイク  
—天然と加工の矛盾—  
中島 里和 インドの綿織物  
—研究史の整理と分析—  
原田 沙苗 伊勢市における町並み保全型まちづくり  
—明治時代以降の動向を中心に—  
渡邊菜穂子 日本におけるガールスカウト運動史  
—山梨県を事例に—

# 文学専攻科 平成30年度研究論文題目

## 佐藤 隆 先生

細萱 愛貴 多様な視点から考える「読解力」  
吉度航太郎 学級づくりにおける学級通信の役割

# 大学院文学研究科 平成30年度修士論文題目

## 国文学専攻

### 鈴木 武晴 先生

塚原 瑞穂 オオケツヒメの神話  
長谷川豊輝 風土記の浦島子伝の研究  
—伊預部馬養と浦島伝承—

### 佐藤 明浩 先生

中里 真琴 『玉藻前物語』諸本の研究  
—根津美術館蔵・絵巻を中心に—

### 寺門 日出男 先生

千田あかり 中国文学における音楽  
—六朝詩を中心に—

## 社会学地域社会研究専攻

### 田中 里美 先生

宇佐美真悟 東日本大震災によって山梨県へ避難してきた  
人に対する支援の経過と意義  
—東日本大震災・山梨県内避難者と支援者を  
結ぶ会の活動—  
丸山周太郎 リニア中央新幹線の課題分析  
—交通政策史からの考察—

### 進藤 兵 先生

森岡 秀介 表現の自由とマスメディア  
—近年の日本憲法学における表現の自由論  
争を踏まえて—

## 英語英米文学専攻

### 福島 佐江子 先生

新部 史歩 The Development of Politeness Theories and  
its Application to English Teaching  
—ポライトネス理論の発展と英語教育への  
応用—

## 臨床教育実践学専攻

### 鶴田 清司 先生

加藤 萌香 創造性を育てる図画工作科の授業づくり  
—キット教材を乗り越える実践提案—



2018年度英文学会主催後期講演会

## 「通訳者の視点から見たグローバルと日本」

開催：2018年11月21日(水) 講演者：小熊弥生 氏

英文学会では同時通訳者として各国の大統領やノーベル賞受賞者などの通訳を経験後、現在は英語セミナー講師としてご活躍中の小熊弥生さんを講師としてお招きし、「通訳者の視点から見たグローバルと日本」と題して後期講演会を行いました。

講演の始めに小熊さんは通訳の実演をしてくださいました。内容は富士山学について、例えば「巫女」や「シャーマン」といったその分野における「背景知識」を身につけていることが、逐次通訳において英語の能力以上に必要なことであるということをご教壇にいただきました。小熊さんは短大卒業後にお金を稼がなければならないという必要性に駆られ、通訳者を目指し始めたそうです。しかし、当時の小熊さんの英語力はなんと英検4級、TOEIC280点。一体どうし

てそこから通訳者になることができたのでしょうか。小熊さんはそれは「火事場の馬鹿力」だとおっしゃいます。自分にとって限界に近い状況を体験したことで、いざという時にどのように行動すればよいか身についたそうです。また、学習において大切なことを二つ挙げられました。「感情と記憶の結びつき」と「学んだら教えること」です。感情と記憶は強く結びついています。例えば、2014年の3月11日と2011年の3月11日の出来事については2011年3月11日のほうがより多くのことを記憶しているでしょう。強い感情を抱いた時ほど記憶に残りやすいのです。したがって、間違えることが最善の勉強法になるそうです。なぜなら、恥ずかしいという感情を抱いたことによって強く記憶に残るからです。そして、「教えること」は学習の

定着率を示すラーニングピラミッドのなかでも一番高い割合を占めています。小熊さんは英会話学校の講師になったことによりアウトプットの機会を得てさらなる英語力の向上につながったそうです。

通訳者として国内外の人々と多く接する小熊さんに、日本人の良い部分と悪い部分について語っていただきました。日本人の良い部分は「polite」であることだそうです。相手のことを考え、他人に迷惑をかけないようにする性質があるそうです。また、どんな人も自分の仕事に誇りをもち、決して手を抜かないということを通訳を通して感じたそうです。悪い部分については、自分の意見を言えない、言わないところです。「Why am I here?」と自分自身に問い、自分を知る必要があるそうです。知らないことは、可能性を狭めて自分を不幸にしてしまうと小熊さんは考えています。また、今後の社会のためには、ものごとをインターナショナルに考えるのではなくグローバルに考えることが必要だともおっしゃっていました。

独自の学習方法によってTOEIC280点から、通訳者へと上り詰めた小熊さんですが、そのとでも明るく情熱的な講演は、多くの学生たちの英語学習に対する意欲をさらに高めたのではないのでしょうか。

(英文学科2年 相楽 美結)



### 講師紹介

#### 小熊弥生 (おぐま やよい)

1971年生まれ。1991年実践女子短期大学国文科卒業、2004年早稲田大学社会科学部卒業。株式会社ブリッジインターナショナル代表。著書に「TOEICテスト280点だった私が半年で800点、3年で同時通訳者になれた42のルール」など。





2018年度比較文化学会前期講演会

ラフカディオ・ハーン

## 小泉八雲 ～オープン・マインドでみた日本～

開催：2018年7月11日(水) 講演者：小泉 凡 氏

2018年7月11日に、小泉凡先生を招いて比較文化学会主催の講演会「小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)～オープン・マインドでみた日本～」を開催した。小泉八雲は日本の比較文学では最も研究されている作家のひとりであるが、彼が日本人だと信じ込んでいる学生も多い。ぜひ小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)について知ってもらいたいという想いから今回の講演会を企画した。

小泉凡先生の曾祖父にあたるラフカディオ・ハーンは、ギリシャ・レフカダに生まれたイギリス国籍のアイルランド人である。幼少時代をアイルランドとイギリスで過ごし、アメリカで新聞記者として活躍した後、マルティニックというカリブの島で旅行記を執筆した。日本に渡り、日本人女性、小泉セツと結婚し小泉八雲として執筆を続けたが、今日では珍しくもない国際結婚も、当時は「雑婚」と呼ばれ、妻のセツにとっては風当たりの強いものであった。

小泉先生は、ハーン作品の先見性と現在の社会とのつながりについて指摘された。例えば『知られざる日本の面影』(Glimpses of unfamiliar Japan)

では、ハーンは将来日本に必要なのは自然との共生とシンプルライフであると説き、「自然は過ちを犯さない。生き残る最適者は自然と最高に共存できるものである」と語った。東日本大震災後、人と自然との調和の大切さを再認識した我々にとって、ハーン言葉は心に響くものがある。

さらに、ハーンの文学作品が地域の活性化に一助となる可能性を小泉先生は示唆された。例えば「勝五郎の話」は実在した人物を題材にした生まれ変わりの物語だが、登場人物の子孫が親交を続けて「生まれ変わり物語探求調

査団」が組織されたという。さらに、ハーンの『怪談』をもとにNPO法人松江ツーリズム研究会が2008年からゴーストツアーを企画し、大成功を収めたことも紹介された。

豊富な写真とエピソードを交えながら、レフカダ、アメリカ、マルティニック、松江、熊本、神戸、東京と移動するハーンの「片道切符の旅」の展開に、学生たちはじっと聞き入っていた。小泉先生のお話を通じて、学生たちも文学作品が文化的な資源であり、それが人々を結びつけ、日常を見つめ直すきっかけになることを学んだはずである。

(比較文化学科准教授 齊藤みどり)

### 講師紹介



#### 小泉 凡 (こいずみ ぼん)

小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。1961年東京生まれ。成城大学・同大学院文学研究科で民俗学を専攻後、1987年に松江へ赴任。妖怪、怪談を切り口に、文化資源を発掘し観光・文化創造に生かす実践研究や、小泉八雲の「オープン・マインド」を社会に活かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。2017年7月、日本・アイルランドの文化交流貢献で外務大臣表彰。主著に『民俗学者・小泉八雲』(恒文社、1995年)、『怪談四代記―八雲のいたずら』(講談社、2014年)ほか。小泉八雲曾孫。日本ペンクラブ会員。



都留文科大学国語国文学会秋期講演会

## 「詩の言葉の働き」

開催：2018年11月21日(水)

講演者：佐藤伸宏 氏

詩によって生み出される世界、あるいは詩を通して感じられる世界の豊かさとは、私たちが普段使っている言葉とは何か違う働きによって生み出されるように感じられることがあります。佐藤先生はまず、ご自身の詩との出会い、驚きの体験も紹介する形で丸山薫の「島」という作品を挙げられました。航海の途中で小さな島を通り過ぎた際の船乗りたちの反応を描いた詩で、特に複雑な内容ではありませんが、しかし一つ一つの言葉の配置やその響き合いを縦横に読み味わうことによって、そこに語られていること以上の光景や心情といった豊かなイメージが浮かび上がってくるさまを実感させていただきました。

次に挙げられた三好達治の「雪」はよく知られた作品ですが、わずかに2行の平易な短詩で、語り出されている事柄とい

えば、眠る兄弟と屋根に降り積もる雪を描いただけの単純極まりない内容です。にもかかわらず、無名に近い「太郎」「次郎」という名前の普遍性や連続性から、個別の情景を超えて多くの子どものイメージが広がっていき、それが「ふりつむ」という現在形による持続の印象にも支えられていること、また表には現れない母親の気配が背後に呼び起こされること、一方でここに描かれているのは人間の子であるのか（たとえば飼犬であったらいいのか）といった解釈の可能性もあること等が示されました。

さらに話題は、斎藤茂吉の連作短歌「死にたまふ母」に及びました。そのピークと目される一首には、死の床の母に寄り添う者を含みこむ空間の奥行きと広がりがあり、一首の中心にある「しんしんと」という平仮名の擬態語に情感豊かに包み込まれ

ています。先生はこの歌に対していくつもの翻訳があることも紹介されましたが、それらも詩の言葉の開かれた性質を示しています。辞書的な意味に限らないイメージを喚起し、一つの言葉がいろいろな連想を派生させること。言葉はそれ自体が固有の音色や音響を伴っている一方で、文字として視覚的な印象を有すること。この一首に駆使されている詩の言葉の働きとは、私たちと言葉の多様なかわり方を示すものであって、揺れない意味を効率的に伝えようとするコミュニケーションの道具という日常的な側面は、実は言葉というものの本来的な機能からすれば、ごく限定的な（あるいは貧しい）ものでしかないかもしれません。

先生は最後に、ジョージ・オーウェルが未来の管理社会を描いたディストピア小説『1984』に出てくる「ニュースピーク」と呼ばれる人工言語に触れられました。文法や語彙を整理削減して唯一特定の意味への収束に向かいながら、人間が思考し想像する能力を低下させていく悪夢のようなストーリーですが、作中でそれは2050年までに完成するだろうと予言されています。詩というものの豊かで無類の世界に触れることは、言葉の働きを回復するうえで重要な使命を帯びた営みだろうと結ばれました。

(国文学科教授 野口哲也)

講師紹介



佐藤 伸宏 (さとう のぶひろ)

1954年生まれ。東北大学文学部(国文学専攻)卒業、同大学院文学研究科博士課程(国語学・国文学・日本思想史学専攻)修了。ノートルダム清心女子大学、宮城学院女子大学を経て、1989年より東北大学に勤務。現在、東北大学大学院文学研究科教授。博士(文学)。専門分野は日本近代文学、比較文学。とくに日本近代詩に関する比較文学的研究、翻訳研究。岡崎義恵学術研究奨励賞、日本詩人クラブ詩界賞(研究・評論部門)。主要著書に『日本近代象徴詩の研究』(翰林書房)、『詩の在りか一口語自由詩をめぐる問い』(笠間書院)他。



2018年度国際教育学科講演会

## 大衆文化から学ぶ ―日本無声映画は生きている―

開催：2018年11月28日(水) 講演者：片岡一郎 氏

今から100年前、映画が活動写真と呼ばれていた頃、それには音がなく無音だった。活動弁士は、活動写真すなわち無声映画（サイレント映画）を上映中に、その内容と映画のセリフを語りで表現して解説する専門の職業的解説者。そして今なお当時の映画に語りをつける、活動写真弁士がいる。

2018年11月、国際教育学科が「Learning Japanese Culture Through Popular Entertainment」の仕組みで「Special Lecture and Film Screening of The Serpent/Orochi with Live Narrator (benshi) and Music Performance by Kataoka Ichiro and the Otowaza Ensemble」と言うイベントを開催した。映楽四重奏は都留文科大学における二度目の実演を行った。映楽四重奏とは活動写真弁士、ピアノ、三味線、太鼓によるユニットで、無声映画時代に生み出された日本独自の上演形態である和洋合奏を基本とし、現代に通じるエンタテインメントとし

て無声映画を各地で上映している。

今回、上映したのは1925年に制作された阪東妻三郎主演の『雄呂血』である。従来、歌舞伎や講談などの以前から日本に存在する古典芸能を基とし、英雄豪傑・勲善懲悪といった物語展開が大勢を占めていた日本映画にあって、本作は悩める主人公が、その生真面目さゆえに誤解され破滅してゆく様を描いた作品で、当時の観客に圧倒的共感をもって受け入れられた。また作品終盤における約十分におよぶ長大なチャンバラシーン

は時代を超えて通ずる身体芸である。

2019年には周防正行監督による活動写真弁士を主人公にした『カツペン!』の公開が予定されているが、本作は周防作品ともリンクするため、上映の意義は極めて高い物であった。

また今回、活動写真弁士を務めた片岡一郎氏は第一人者・澤登翠の一番弟子であり、海外公演にも積極的に取り組んでおり、これまで一八ヶ国で公演を行っている。

(国際教育学科講師 Johan Nordström)

### 講師紹介



#### 片岡 一郎 (かたおか いちろう)

昭和52年 東京生まれ

平成13年 日本大学芸術学部演劇学科を卒業

平成14年 活動写真弁士の第一人者である澤登 翠に入門。澤登門下総領 弟子。レパートリーは日本映画・洋画・中国映画・アニメ・記録映画と多岐に渡る。これまでに手掛けた無声映画は約350本。バイオリン演歌を福岡詩二、紙芝居を秋山栄栄より指導を受ける。これまで日、米、独、加、豪、克、伊など16カ国で公演。その他にも執筆や舞台出演、声優業もこなす。



ジェンダー研究プログラム2018年度講演会

## 自分らしく生きる社会を作ろう

開催：2018年12月5日(水) 講演者：大澤祥子さん

(一般社団法人ちやぶ台返し女子アクション代表理事)

### 「何を今更」をあえて問うことの大切さ

「おかしいと思うことを、おかしいと言えない。」講師の大澤さんは、埼玉で生まれ、アメリカで小学校時代を過ごして戻った日本で感じてきた違和感から、この日の話を始められた。講演のタイトルは、「自分らしく生きる社会をつくろう」だったが、話の中心は、日本ではまだ耳慣れない「性的同意」になるはずだった。「同意」は、両性間の性的関係にとどまらず、人と人との対等な関係に欠くことのできない手続きだ。しかし「性的同意」となると、「そんな野暮な」と一蹴され、この社会で顧みられているとは言い難い。学生たちにも大いに関わることなのだが、正直言ってちょっと敷居が高いかなと思われるこの主題を、大澤さんがどう切り出すのか、当初、私の関心はそこにあった。

配布されたパンフレットにあるとおり、同意のない性的言動はすべて性暴力である。だからこの社会では、性暴力が日常化している。それは親密な男女や夫婦の間においてもだ。しかし「おかしいこと」は他にも多々あり、大澤さんは、それらをおかしいと言える場を作ることから始めたかったと言う。たとえば

彼女は、働く女性たちが、長時間労働当たり前の会社に100%尽くして「活躍させていただいている」ことや、職場が家庭の択一を迫る性別役割観念の根強さを問題にされた。こんなことに、すすんで同意したい女性などいるだろうか。にもかかわらず、それを当たり前と思う側は、いちいち女の同意など取る必要はないと高をくくっている。彼らにとっての女性は、自分たちが自由に活用できる「モノ」なのだから。

講演はこうして外堀を埋めながら本題の「性的同意」の話に入っていた。そして、「性的同意」で重要な三点として非強制性・対等性・非継続性が挙げられた時、そうした同意を女性から得たか否かを問うことは、女性から力を奪い従属させることで安泰・利潤・成長を追求してきた社会、そのジェンダー秩序への挑戦なのだと思わされた。ハリウッド発のセクハラ告発ムーブメント、#MeTooに日本内外の女性たちが連なり、雑誌の「ヤレる女子大生ランキング」記事に抗議が殺到する時、これまで呑気に構えてきた側は、この「女性からの同意」をめぐる挑戦にさらされていると言っている。それを「何

を今更」と失笑しているようでは、意のままにならない女性に付きまとった末に殺害する事件もなくならない。

大澤さんは、この挑戦を「こういうのを変えて、それを文化として根づかせたい」と語り、講演の終盤、学生たちをロールプレイに誘われた。劇には、同じサークルの同級生A子とB男が登場し、A子は、サッカー観戦の帰りにB男の部屋で望まない性行為を受け入れてしまう。そこに至る過程では二人が囚われている様々な社会通念がB男の先輩の声などになって二人に囁きかける。つまりこのロールプレイの演者は、これまで問わずにきたジェンダー規範をあえて口にすることで、「それでいいのか」と考えるきっかけを得ると期待されているのだ。

ところがある学生の素朴な感想は、そうした発想の虚を突くものだった。学生曰く「A子がB男を好きな気持ちが先行して、自分の本当の気持ちを大切にできなかった。」学生同士の性的同意を左右するのが、個々の気持ちの問題とされがちなのは、彼らがこの社会のジェンダー秩序という空気を読んで男女の権力格差を云々するのを躊躇い、また学生間の社会的地位や経済力などの差が捨象されがちの中で、自分たちは対等か、と問えずにいるからなのか。しかし、自分の相手に対する思い入れを利用され相手に支配されるとしたら、それもまた対等な関係とは言えない。性的同意が対等な関係において確認されるべきというのはそのとおりだが、難しいのはむしろその対等性の追求の方かもしれない。そこで私たちは親密な他者との対等性をどう思い、それをどう実現し、また何がそれを損なうのかについての不断の思考を求められるからだ。

分田順子(比較文化学科・教授/  
ジェンダー研究プログラム運営委員)

### 講師紹介

#### 大澤 祥子(おおさわ しょうこ)

(ちやぶ台返し女子アクション 共同発起人・共同代表理事)  
慶應義塾大学卒。学生時代の留学先(フランス)で声をあげている同世代の仲間たちや、帰国後同じ思いを持つ女性たちとの出会いを通して、「私たちがおかしいことはおかしいと声を上げることで、社会は変わる!」と実感する。自分たちの生きづらさに対し女性自身が共に声を上げることで、社会的・政策的な変化を起こしていくムーブメントを作りたいと思い、2015年にキャンペーン団体「ちやぶ台返し女子アクション(<http://chabuju.com/>)」を立ち上げる。



## 卒業演奏会を終えて



音楽専攻生として入学してから4年、この4年間音楽が私の傍から離れた事は一度もありませんでした。

卒業演奏会という大舞台で堂々と、そして心から楽しそうに演奏する先輩方を初めて見た時、4年後の自分を期待と不安の入り混じった複雑な気持ちで想像した事をとても鮮明に覚えています。

そんな私も大学4年生となり、卒業演奏会を迎える年になりました。この卒業演奏会までの期間は、大学生活の中で一番音楽と向き合った期間でもありました。想いを上手く形に出来ない事への悔しさと歯がゆさ、圧倒的な力不足と情けなさを痛感しました。しかし同時に、曲への理解が深まる程感じる楽しさと歌う事への幸福感も、この4年間の中で一番強く感じる

事ができました。

そして迎えた本番。4年間で学んできた事、感じてきたもの、その全てを音楽の中に込めて自分らしく演奏する事ができたと思います。

4年間ご指導下さった心から尊敬する先生方、共に切磋琢磨してきた同期、目標だった先輩方、支えてくれた後輩たちや友人、そして最後まで支え見守り続けてくれた家族、沢山の大切な方々の前で歌えた事を心から幸せに思います。

音楽専攻で過ごした4年間は、私の一生の財産で、そして一生の宝物です。

(初等教育学科音楽専攻4年 代表 佐藤愛子)

## 卒業制作展を終えて



搬出作業直前、最後の記念写真

私は2年次に図工・美術専攻を選択し、彩画・彫塑・版画・工芸など様々な分野の制作を通して、学びを深めてきました。ものづくりに興味があったため、3年次では立体ゼミに所属、立体表現の可能性について考えてきました。

私は、ものづくりの面白さとは「発想力と想像力」ではないかと考えています。「こうしたら面白いのではないかな」、「この表現はどのようにすればうまくいかな」と考えているときがとても有意義だと感じます。実際にかたちとして表していく中で、失敗もありますが、そこからまた新たな発見が生まれます。その積み重ねが、ものづくりには大切であることを、自身の制作体験やボランティアとして参加した陶芸教室や保育園での活動の中で、改めて感じました。

私はこの1年間、卒業制作展に向けて「DIGITAL ずこうじつ」のレーザーカッターを使い、作品を制作してきました。学習指導要領の改訂の趣旨にある通り、これから更に普及するであろうICT技術に触れながら、ものづくりができたことは、

教育現場に携わるなかでも大きな力になるのではないかと感じています。

今年の卒業制作展は、大きな油絵の作品から、繊細な鉛筆画、実用性のある作品や光の変化を楽しむ作品など、図工・美術専攻一人一人の個性を感じることができた展覧会になりました。また本展には地域の方々を含め、大学関係者、友人など多くの方にご来場いただき、「面白かった」「来てよかった」などお褒めの言葉をいただくことができました。

このように楽しく制作することができたのも、御指導いただいた先生方、良い刺激を与えあえる仲間がいたおかげだと思います。素敵な環境の中で学ぶことができたことを、本当に嬉しく思います。

文末ながら、お忙しいなか卒業制作展に足を運んで頂いた多くの方々、開催に向けて関わってくださった皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

(初等教育学科図工・美術専攻4年 八田美咲)

## 平成30年度第1回文大名画座を1月9日(水)に 自然科学棟S1教室で開催しました。

上映作品は、山梨県市川三郷町を舞台に撮影されたドキュメンタリー映画『ひいくんのあるく町』です。この作品は、市川三郷町出身の青柳拓監督が日本映画大学の卒業制作作品として制作したもので、「2017年座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル」コンペティション部門入賞や「映文連アワード2017」準グランプリ受賞などの賞を受賞し、4月に開催された地元上映会では1000名以上の観客を動員、圧倒的な支持を集め、全国の劇場でも上映が行われました。

当日は青柳監督と渡井秀彦さん(ひいくん)をお招きし、地域の方や、学生など約40名の参加者と共に作品を鑑賞しました。

参加者からは、「暖かさと何か寂しさの残るような作品だなと感じました。町の人たちの人情深さに心がじんわりと温かくなったし、現代では薄れていって

る人の繋がりを感しました。また、それと同時に町が変化していく、廃れていってしまう様子に悲しさを覚えました。」「ひいくんが街の中に溶け込んで、地域の方と自然に交流している姿が心に残りました。街はずいぶん変わってしまっているけれど、いつも笑顔で歩いているひいくんは、常に安心感がある存在であるのかなと思って心が暖まりました。」「何とゆるやかに、とても自然に、人を、障害者を、老いを、病を受け止めることのできる町なのでしょう。ありのままに、自然体で生きているひいくんと、周りの人達が、うらやましく思いました。言葉は少なくとも伝わるものがあることを、改めて感じる事ができました。」「心が温まる映画でした。ひいくんの優しさ、町の人たち、家族の人たちの優しさ、温かさがこの映画から伝わってきました。」などの感想が寄せられました。



文大名画座 質問会の様子



青柳 拓監督

## 平成30年度第2回文大名画座を1月23日(水)に 自然科学棟S1教室で開催しました。

『屋顔』『終電車』『インドシナ』から、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』『8人の女たち』など数々の名監督たちの傑作を彩り、現在でも若手監督の作品への出演を活発に続け、2008年のカンヌ国際映画祭では特別功労賞を受賞し、2018年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞した、仏映画界が世界に誇る名花カトリーヌ・ドヌーヴ。そんな彼女を一躍スターダムに押し上げた大ヒット作が、1964年の第17回カンヌ国際映画祭においてグランプリを受賞した、ミュージカル映画・恋愛映画の傑作として、いまなお映画史に燦然と輝き続ける不朽の名作『シェルブールの雨傘』です。今回は、この『シェルブールの雨傘』を、山口博史COC推進機構准教授の解説付きで上映しました。

参加者からは「フランス語のニュアンス、フランスの地理などの解説を上映前に聞くことができてよかった。『シェルブールの雨傘』は前に一度みたことがあったが、解説がついているということと、大きい画面で見られたことでよりいっそう楽しめた。」「名前や距離感、あるいは慣用句の解説のおかげで見ている最中に声を出しそうになりました。セカンドベストな幸福をここまで鮮烈に描いている作品なのですね。」「初めて全編音楽の映画を見ました。素晴らしいストーリー

でした。先生の解説が適度に映画の一場面を表現していて良かったです。」「作品の中身製作時の時代背景などが聴けたので映画を身近に感じました。始めに解説があったお陰で見るべき所を見逃さなくて済みました。」「上映前に先生から時代背景とキーワードの説明があったので、内容がすんなりと入り映画を十分楽しめました。」などの感想が寄せられました。



地域と学生を結ぶ

# 「ぷらっとはうす」

教養学部地域社会学科 1年  
野口裕太・島田千聡・福元健之



キックオフの大掃除の日に



◀子どもたちの様子



▼餅つきの様子

「ぷらっとはうす」は、地域社会学科鈴木健大准教授のオープンゼミとして、富士急行谷村町駅舎を活用した中心市街地活性化プロジェクトの最初の取組です。メンバーは現在 26 人、駅舎内がかつて社員が住み込んでいた六畳二間のスペースを借りて、地域の小中学生・高校生の居場所作りを昨年 12 月から毎週水・木曜日の夕方に実施しています。キックオフとして、富士急行、早馬町内会、都留市役所、生涯活躍のまち・つるのみなさんと駅やその周辺の大掃除をしました。普段は、「朝活」と称し、1 限前に学食に集まってミーティングや準備をしています。名前の「ぷらっと」には地域の皆さんに「ぷらっと」来てほしい、駅にあることから乗降場の意味を表すプ

ラットフォームの「ぷらっと」、そしてまちづくりの「プラット」フォームにしていこうという意味が込められています。

「ぷらっとはうす」で子どもたちは、大学生に宿題を教えてもらったり、大学生と一緒に絵を描いたり、トランプや UNO をしたり、恋バナをしたり…とそれぞれ好きに過ごしています。私たち大学生は、保護者が帰宅するまでの放課後の隙間の時間を子どもたちが安心して楽しく過ごせるように工夫しています。

また、土日を利用して地域の皆さんと一緒にイベントも行っています。1 月は都留市エコハウスで「新春餅つき大会」を開催し、たくさんの方にお越しいただきました。最近ではあまり目にする事のない餅つ

きに最初は子どもたちは少し怖そうに遠まきに見ていましたが、最後はみんな楽しそうに餅をついていました。次回のイベントは、4 月の予定です。

まだまだ私たちの活動は始まったばかりで、走りながら考えている状態です。ほとんどのメンバーが山梨県出身ではないため山梨の文化、ましてや都留の文化は分からないところからスタートしました。ですが地域の方々のご協力もあり、「ひいち」を一緒に作らせてもらうなど、都留の文化に触れる機会を頂いています。ありがたい限りです。若いパワーで貢献していきたいと思っています。「ぷらっとはうす」をよろしく願いいたします。

## 文大オリジナル商品

都留文科大学では、平成 30 年 2 月に発足された「首都圏都留市会」と連携を模索する中、都留市出身の方が神奈川県と東京都で経営している洋菓子店「パティスリー アノー」と企画を練り、都留文科大学のロゴが入ったお菓子を商品化することになりました。

この商品は都留市内の店舗「café sowers」で、1 月下旬から販売を開始しております。販売については、「café sowers」の Twitter (ツイッター) アカウントでご確認ください。また、今後はオンラインショップなどでの販売も検討しています。



ツルブンチョコサンド

### 訃報

平成30年12月23日(日)、元学長 大田 堯氏がご逝去されました。ここに先生の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

# 図書館にゲーム？

共通教育 准教授 日向 良和

昨年10月に国立国会図書館井上さん、元公共図書館司書の高倉さんと共著で「図書館とゲーム イベントから収集へ」を上梓させていただいた。日本図書館協会の関係各位、何より共著者の井上さん、高倉さんの熱意で挑戦的とも言える本が図書館の専門書シリーズとはいえ出版できたことに喜びを禁じえない。改めて感謝申し上げたい。

さて、本書のテーマについて、私は副題に込めたつもりである。2017年度頃より日本の図書館でも「ゲーム」を遊ぶイベントが各地で行われるようになった。本書を参照していただければ理解いただけるが、いきなり始まった訳ではなく、海外からの事例紹介としては、アメリカでは、アメリカ図書館協会がInternational Games week というイベントを毎年開催している。

現況日本ではアナログのボードゲーム中心で、ゲームは私物持ち込みがほとんどであり、図書館資料費が



らゲームを収集する形になっていないが、私は少なくとも日本においてはゲームが現代文化の重要な位置を占めており、デジタルを含めて図書館で収集すべきと考えている。そんな取り組みの嚆矢に本書がなっただけことをねがう。

## ぶんだい堂

学びの質を高める！ICTで変える国語授業  
—基礎スキル&活用ガイドブック—単行本



野中 潤 著、編集  
2019年2月7日発行  
明治図書

◇のなか じゅん  
国文学科 教授

## 「鏡花人形 文豪泉鏡花+球体関節人形」



吉田 良・野口哲也 編著  
2018年6月発行  
河出書房新社

◇のぐち てつや  
国文学科 教授

## 「3・1独立万歳運動と植民地支配体制」



李 泰鎮・笹川紀勝 編集  
2019年2月発行  
ソウル、知識産業社

◇ぴょん よんほ  
比較文化学科 教授